

闘コオロギからみた中国漢人都市民の自然観

菅

豊

1、問題の所在

中国における自然観は、「文化」と「自然」、あるいは「人間」と「自然」との間を厳格に画する、ヨーロッパ的な構図から読み解けるのであろうか。「文化」と「自然」を二項対立の構図でとらえるやり方は、世界を理解するための体系化の一方法に過ぎない。当然、その方法は普遍的ではありえない。それとは位相の異なった体系化によって、世界を理解する人々が多数存在するはずである。このような独自の体系を有する人々を語るのに、「文化」と「自然」の対立の構図はあまりも狭隘すぎる。もし、ここで取り扱う中国文化がそのように異なった体系をもっているとするとき、我々のもつ「自然」や「文化」という言葉では十分に語りえないこともありえるであろう。

中国漢人社会における世界理解の体系は、中国漢人の精神構造と大きく関わる。その体系は、ときには「風水」と

いう表現で置き換えられるかもしれない。ただ、人類学的文明社会研究に大きな足跡を残したモーリス・フリードマンをして、「人間と自然とを厳格に区別する伝統のなかで育った者にとって、一度に風水の根本的な前提を把握することは困難である」「フリードマン 一九九五・一五八」と吐露せしめるほど、この体系は我々日本人を含めるヨーロッパ的思想に浸潤された人間には、かなり理解が難しい。「風水」を「風水」の言葉で語るとは、簡単には現在の我々にはできないのであって、それを理解するためには、我々の世界体系化の枠組みへととりあえず翻訳せねばならないのである。その意味において、中国漢人の自然観を語るときに、nature になつてしまった「自然」という言葉は不自由なのである。

中国では、様々な開発、あるいは都市化にともなつて、古くより多くの「自然」を消失してきた。しかし、同時に、人為的に「自然」を模し、生活空間へと積極的に導入する文化的風土も育てあげてきた。その代表的なものに、園林文化がある。園林文化は、庭園をめぐる文化であり、身近な空間に山水を模した擬似的「自然」を構築する文化である。それは、中国漢人の宇宙観や、人間の人格形成観と強く結びついて精緻な発展を遂げている〔王毅 一九九〇〕。園林文化は、その仕組みの大きかりさからいつて支配者層、富裕層が主たる担い手であった。その一方で、都市民らは、盆栽や飼ひ鳥、観賞魚など小型で手軽な栽培・飼育技術を用いることにより、擬似的小「自然」をその生活に導入する文化を培ってきた。これが花鳥魚虫文化である。

花鳥魚虫文化は、単なるペット飼育、園芸栽培ではない。それは、小さな「花」、「鳥」、「魚」、「虫」などの動植物を愛玩し、その飼育・栽培を通して、そこに「自然」を観賞し体感する文化である。それはまた、動植物を単に育てるといふ行為のみならず、飼育・栽培に関わる器物、道具類、さらに花鳥魚虫をモチーフにした絵画、彫塑類という。工芸文化を随伴し、文芸作品にも描かれる文化である。中国漢人の精神世界の発露といつても、決して大げさではない。

「花」は、草本、木本問わず、観賞する花卉、観葉植物、切り花を指し示す。この「花」の栽培文化のうち、もつとも体系化されているのが盆景（盆栽）文化である。「鳥」は、その容姿を観賞するものから、鳴き声を愛でるもの、なかには闘わせて楽しむものもある。「魚」は、金魚に代表される観賞魚で、最近では熱帯魚や日本で作出された錦鯉なども愛好されている。「虫」は、キリギリスやスズムシ、クサビバリなど鳴き声を楽しむものから、コオロギのように闘わせて楽しむものなど多彩である。

花鳥魚虫文化の形成に際しては、園林文化同様、やはり皇帝や貴族などの支配者層、富裕層、また、文人等の知識人層が担った役割は大きい。しかし、開花した文化の精緻化は庶民層、とくに都市民の貢献なくしてありえなかつた。花鳥魚虫文化は、消費文化を謳歌する都市の人々とともに発展してきたのである。ただし、その文化の継承には、まだ、動植物の豊富な地方の人々の存在も無視できない。花鳥魚虫文化をみるにあたり、文化の素材である「自然」を消費する都市と、その「自然」を生産する地方とを対置して考えることは重要なのである。なぜならば、「花」、「鳥」、「魚」、「虫」いずれも、都市内部ではほとんど生み出すことができないからである。そのため、都市の外側から大量の「自然」を供給することによって、花鳥魚虫文化は、はじめて成立するといえる。花鳥魚虫文化において、都市と地方は断つことのできない関係性を取り結んでいる。しかし、従来、花鳥魚虫文化は、都市における文化の発露の部分にのみ関心がもたれ、それを支える全体性はほとんど注目されてこなかつた。

本稿では、「花」、「鳥」、「魚」、「虫」のうち、ひとつの対象を選び、地方から都市へと「自然」が流れいくプロセス

の全体的なドキュメンテーションをまず行う。そして、次にそれによって、なんの変哲もない普通の動植物が、徐々に人間に意味づけられ、価値や形を与えられ続けながら、花鳥魚虫文化へと昇華される道筋を明らかにする。その際、対象とするのは「虫」のコオロギである。

コオロギは中国の都市民によって、闘コオロギ（「闘蟋」、「闘蚰蚩」）という遊戯・競技に用いられてきている。彼らは、個体識別、飼育、闘技など様々な段階において、細部にわたって多様な民俗知識と技術を保持しており、花鳥魚虫文化としての闘コオロギ文化を担っている。しかし、もともと、高度に都市化された社会には、都市民に愛されるコオロギは存在していない。それは、各地方の山野から都市へと流入してくるのである。したがって、闘コオロギ文化の、全体像をおさえるためには、まず、その山野から人間がコオロギを獲得する局面からとらえる必要がある。次いで、都市へもたらされ実際に利用される局面から、その「あるがままの生身のコオロギ」が、人間から意味や価値を付与、投影され、人間が考える「あるべき闘コオロギ」へと、形作られるプロセスを明らかにせねばならない。本稿では、コオロギが地方から都市へとたらされ、徐々に花鳥魚虫文化のなかに位置づけられる様相を実態的に検討し、そこから、中国漢人都市民の自然観を垣間みることを目標とする。

2、コオロギの出自

コオロギは古くは「促織」とも呼ばれ、現代の中国普通話（共通語）では「蟋蟀」である。しかし、上海の人々は一般に上海話で「財吉」と呼び慣わしている。一方、北京や天津などの北の人々は「蚰蚩」という方言で呼んでいる。

コオロギを売買する上海の花鳥魚虫市場では、全国各地の人々が集まっているために、「蟋蟀」と語られることが多い。闘コオロギは、「秋興」とも呼ばれ、中国の秋の風物詩となっている。二匹のオスコオロギを闘わせ、強弱を競う娯楽で、ときには賭博の対象ともなってきた。

闘コオロギの歴史は、唐代開元天宝年間（八世紀前半）にまで遡るとされるが「張 一九八九・二七〇」、実際に確たる史料で裏づけられるのは、一二世紀以降の南宋に入ってからである。南宋の宰相賈似道は、当時の闘コオロギに関する技術、知識を総覧した『促織経』二巻を編んだ。これには闘コオロギの生態から捕捉法、飼育法、品種・形態・色による見分け方などが、多岐にわたって記載されており、南宋時代にはすでに高水準の闘コオロギ文化が形成され、その文化が「遊戯」の領域から「芸術」の領域へと高められる過渡期にあったことが指摘されている。たとえば、唐代には用いられなかった、「蟋蟀盆」という直径一二〜一三センチメートルの円筒のコオロギを飼育する容器がこの時代から使われはじめ「孟 一九九七・三一四」、後にそれは美術工芸品として扱われるようになる。

闘コオロギ文化の形成には、他の花鳥魚虫文化同様、やはり皇帝や貴族などの支配者層、富裕層などが担った役割は大きい。しかし、『促織経』卷之上、論賦、促織論では唐代以来、「王孫公子」から富豪、庶民に至るまで闘コオロギを賞玩、愛好し珍重していたことが述べられていることから、当時からこの文化が庶民層に広まっていた可能性は否定できない。その後、明代の袁宏道撰『促織志』、劉侗撰『促織志』から、清代の夢桂撰『蟋蟀譜』一巻、金文錦刪定『促織経』一巻、麟光撰『蟋蟀秘要』一巻、民国時代の李大紳纂輯『蟋蟀譜』十巻に至るまで、闘コオロギに関する数多くの指南書、手引書が編まれ、その文化は体系化が進んだ。一方で、庶民たちは賭け事としてそれを嗜むようになり、人々の射幸心は助長され、明代には隆盛を極めた。

北京では、清代には、主たる担い手が支配者層から一般庶民へと移っていく〔孟 一九九七：一一一〇〕。北京西南部の宣武門（順治門）一帯では、毎年秋になると、「秋色可觀」の文字を書いた紅紙を飾った小楼が出ていたが、それはすべて闘コオロギの賭場であったという〔鄧 一九九八：一五九〕。上海などでも清代には、旧上海城内の老城隍廟付近が「虫迷（コオロギマニア）」の楽園であった。解放前まで四馬路（現福州路）付近に集中していたコオロギ市場には、普通のコオロギ愛好家のみならず、博徒やごろつき、無職の遊民などが集っていたという。

解放以降、文化大革命中は政治的影響を受け、他の花鳥魚虫文化と同じく「玩物喪志（道楽にふけり本業をおろそかにする）」というレッテルを貼られ禁止されたが、根絶やしにされることはなく、その文化は継承され続けてきた。上海では、一九五〇年代後期、コオロギ市場が新閘路、泰興路などの「地下」に潜伏し、文化大革命初期には人民広場西端に移った。その後、八〇年代に入っ



図1：蟋蟀会〔『吳友如画宝』（『飛影閣画報』掲載）より〕

て、一〇数カ所の非合法コオロギ市場ができ、一九八七年には、政府から認められた合法的なコオロギ市場が瀏河路に開設された。一九九三年には、文廟路、早橋路、曹安路、本溪路、昆明路の五大コオロギ市場が作られ〔上海灘雜誌社 一九九七：一三三〕、その後小規模なコオロギ売買拠点も発生している。現在は、改革開放以降の経済水準、生活水準の高まりと、政府の規制緩和によって、中国各地で日常の娯楽として多くの人々に楽しまれている。とくに、北京、天津、上海、杭州などの都市部においては、近年、一層の復興を遂げている。

もちろん、この闘コオロギの文化が鄙びた農村で嗜まれなかったわけではない。たとえば、浙江省温州地区では、都市に限らず農村においても行われ、大人から子供まで広く愛好されたという〔葉 一九九二：七九〕。しかし、やはり主たる担い手は都市民であり、その都市性は、都市と地方で経済格差がつきはじめた近年、ますます強くなっている。都市においては、コオロギの商品価値が高く、高値で取引されるため、地方の人々はもっぱら生産者（捕獲者）としての役割を果たそうとするのである。それゆえ、人のいききがある程度容易になった現在では、流通の範囲も格段に広がっている。

かつて、交通機関の未発達だった頃、さらに都市周辺部の農村にまだコオロギが多く存在した頃、コオロギは、都城の郊外からも供給されていた。たとえば、北京の場合、明代崇禎八年（一六三五）に刊行された『帝京景物略』巻之三、城南内外、胡家村の条には、南門である永定門外五里のところにある胡家村が、優れた闘コオロギを産出する地であることが記載されている〔劉 一九八〇：一一二二〕。また、西門の西直門郊外や、北京西方に連なる西山周辺でコオロギ捕りを行っていた記録がある〔凌 一九九四：九五、内田 一九八六：一七七〕。上海でも郊外の浦东や嘉定、金山などでコオロギが産出されるが、これはよそから流入するコオロギに対して「土虫（地元の虫）」と称される。九

○年代初頭から、關コオロギ熱が高まるが、それに乘じて一攫千金を目論む者たちが、上海郊外農村に集結してコオロギ捕りを行い、農地や用水路を荒らし、社会問題となったことさえある〔辺 一九九五a…二二七〕。しかし、このような都市の郊外は、開発や農業の近代化によってコオロギの数を減らしている。そして、遠隔地からの輸送が容易になったため、希少であった有名産地のコオロギが今では大量に都市へと流入している。

元来、コオロギは、その産地が重要視されてきた。そして、時代とともに流行となる産地が異なっていた。たとえば、清代光緒一八年（一八九二）校印『王孫経補遺』、雑説には、土地の良し悪しが、コオロギの優劣に影響を与える旨述べられており、もつともよい産地を江蘇省常熟としている。また、光緒三〇年（一九〇四）排印『蟲魚雅集』一巻、秋虫総論には、名産地として河北省易州（現易県）、涑水、山東省済南、肥城があげられている。

上海では、一〇数年前まで杭州、紹興などの浙江省産や、天津産のコオロギがよいとされていた。しかし、現在は、山東省の寧津、寧陽、樂陵で仕入れられたコオロギの人氣が高い。一九九六年八月調査時点では、上海文廟花鳥魚虫市場に届っていたコオロギは、半数以上は山東省産とされるものであり、その他江蘇省、河北省、安徽省産などがあった。また、一九九八年八月調査時点では、上海文廟花鳥魚虫市場では、六割以上が山東省寧津産、それに寧陽産、浙江省紹興産が次ぎ、それらに混じって山東省樂陵、臨清、曲阜、兗州、安徽省亳州、河北省滄州、浙江省杭州などで産出されたとするコオロギが売られており、「土虫」は皆無であるといつてよいほどである。

現在、コオロギは、捕獲、生産地売買、消費地売買、購入という経路で基本的に流れていく。おおまかにいつて、地方の農民たちが、山野のコオロギを捕獲し、郷鎮レベルの集散地で売却する。この集散地には、コオロギを仕入れるために、都市部からコオロギ商が集まっている。コオロギ商は、仕入れたコオロギを都市へともち帰り、その花

鳥魚虫市場で都市民へと売却する。都市民は、一般に、購入という形でコオロギを手に入れることができるのである。このような基本的な流通の経路以外に、生産者が都市に赴き直接売却したり、消費者が地方に赴き直接買いつけたりすることもある。コオロギ産地の農民のなかには、ただ捕ったものを地元で売るだけではなく、コオロギ集散地でさらに多く仕入れて、都市へともち込み、花鳥魚虫市場で売るといふ、コオロギ商を兼ねた者もいる。また逆に、都市の關コオロギを愛好する者のなかには、コオロギ産地へと赴いて、自分で選択、仕入れてくる者もいる。こういう人は、たいてい多めに購入して、都市へ戻ったら自分の使う分を除いてやはり売却するのである。

ただし、現在の地方の生産者は、コオロギをもつて關コオロギに興じることはほとんどないし、また、都市の消費者は、自分自身でコオロギを捕ることはほとんど行わない。彼らは、コオロギの流通によってつながれてはいるものの、彼らの関心と、その保持する技術、知識、活躍の場には大きな差異があるのである。以下、コオロギとの関わる人々の姿を、現実の場面のなかから描出してみよう。

3、コオロギを見いだす人々

山東省徳州市寧津県は、黄河の下流、魯西北平原の北に位置し、河北省と接している。約八二一平方メートルの県土は、そのほとんどが、トウモロコシやコウリヤンで覆われた農村地帯である。ここは、現在の中国において、もつとも優秀なコオロギを輩出する産地として、その名を全国に轟かせている。

寧津産のコオロギが、現在名声を博しているのには、それなりの理由がある。それは、各地で行われる關コオロギ

大会で、優秀な成績をあげ続けているからである。關コオロギの禁止が解かれた八〇年代以降、各地でコオロギ愛好団体が設立され、それらが主宰する地方大会や、全国大会が行われるようになった。一九八五年、天津では「蟋蟀協会」が設立され、上海では、一九八八年に「上海蟋蟀研究会」が組織された。一九八九年、上海に北京、天津、山東、江蘇、安徽、浙江、湖南の七省市のコオロギ団体が一堂に会して、初の全国大会「濟公杯」關コオロギ大会が開催された。その大会へ参加したコオロギのうち、約七割を寧津出身のコオロギが占め、それが好成績をあげたという。寧津産コオロギの評判は内外問わずたちまち広まり、香港、台湾などからもそれを聞きつけた人々が買いつけにくるようになったという。このような状況のなか、寧津県では政府をあげて、特産品としてのコオロギの生産（捕獲）を奨励している。国内外のコオロギ愛好家を招待して、「蟋蟀節（コオロギ祭り）」なども催され、全国への売り込みも行われた。

寧津産のコオロギの需要が高まり、それを求めてやってくる人々が増加したため、寧津には中国有数のコオロギ市場が形成されている。コオロギの売買が盛んになる八月にもなると、この市場でコオロギを売るために多くの農民が、コオロギ捕りへと変身する。普段は、トウモロコシを中心とした畑作を営む農民たちであるが、このときばかりは大きな現金収入となるコオロギ捕りに奔走するのである。

吳友泰氏（仮名）は、そのような農民のひとりである。彼は、寧津の県城から約一〇キロメートルほど南にあるS村に、妻と子供二人の家族四人で暮らしている。一九六六年生まれで、子供の頃からコオロギ捕りをやっているが、本格的に商売としてはじめたのは一九歳のときからである。一〇数年のコオロギ捕りの経験のなかで、彼は、どこにコオロギがいるが、どんなときにコオロギがあらわれるか、などといったコオロギ捕りに不可欠な知識を身につけてい

る。毎年八月、S村では、トウモロコシも十分に伸びきり、手もかからなくなって時間に余裕のあるこの頃、毎晩コオロギ捕りが行われている。

コオロギ捕りには、時期が重要である。この寧津では八月末の処暑以降に捕れたコオロギが十分に成長していて高く売れるとされる。とくに、九月上旬の白露前後には「將軍（強いコオロギ）」が出現するといわれる。しかし、八月中旬にもなると、多くのコオロギ商が寧津にやってくるため、ある程度の量のコオロギを確保しておく必要があり、実際には八月上旬からコオロギ捕りははじめられる。吳氏も一九九八年は八月五日から、コオロギ捕りを開始している。

S村では老若男女を問わず、コオロギ捕りを行っている。女性や、子供のコオロギ捕りは、昼間が多い。正午過ぎの炎天下のなか、数時間ほど探し回る。しかし、成人男性のコオロギ捕りは、コオロギが巣穴から多く出てくる夜中が多い。夜中にコオロギ捕りを行う者は、たいてい決まって二〜三人連れだつて出かける。吳氏も、同じ村の仲間二人と、いつも組んでコオロギ捕りを行う。このあたりの治安はあまりよいとはいえず、また、所々にある溜め池や、用水にはまる危険性があるので、たとえ大人の男性でもひとりで行るのは憚られるという。長いあいだ雨が降らず地面が乾いているときに、大雨が降ったりすると、その直後には昼間でも、コオロギが巣穴から大挙して出てくるといわれ、そのようなときには、我先に人々はコオロギを探し回る。

コオロギ捕りは、普段は自分の住む村か、その周辺で行う。しかし、なかなかよいコオロギが見つからないことが続いたりすると、少し遠出してみる。よその村でコオロギ捕りをして、別に咎められたりすることはないが、まったく知らないところだと地理不案内なため迷ってしまうこともあり、また、コオロギのいるポイントも知らないため、

たいていは他村の知人を頼って、そのガイドのもとにコオロギ捕りは行われる。コオロギは村中至るところにいるが、まんべんなく分布しているわけではなく、その多寡は場所によって違う。だいたい直径五メートルほどのコオロギが固まっている場所が、村のなかに一〇数カ所あり、自分が普段通っている場所だと、そのようなポイントを熟知しているのがよい。

呉氏も、S村のなかのそういうコオロギの集まる場所は熟知している。呉氏のグループ三人は、距離をあげないよう同じ方向に向かって、コオロギを探し回る。しかし、三人は、それぞれ進む早さが違う。呉氏は、ポイント、ポイントを狙って早く進んでいくほうである。仲間のひとりには、その後ろを丹念に探るタイプで、しばらくすると自然に距離が離れるが、おおよそライトの明かりが確認できる範囲に全員がいる。時折、お互いの名前を呼び合いながら散開し、返事がない場合には探し合う。このように紐を維持しながら、一晩で、同じルートを何回か時間をずらしながら回ることになる。草むらや崖、落ち葉の山、ブタ小屋の跡、石垣の間隙、堆肥場、トウモロコシ畑の縁など、何年にもわたって観察してきたコオロギのいるポイントを探りながら進む。たいていは、足で振動を与えたり、石をひっくり返したりして、さらにいそうだと思ったら、掘り返したりする。

コオロギ捕りの道具は至って簡単である。もつとも重要な道具は、「罫」というコオロギを捕獲するための網である。太い針金で枠を作った口径八センチメートルの小さな網で、かつては銅や鉛の糸で網を拵えていた。今は、弾力のあるナイロン製の糸になっており、この道具自体は、上海などで「虫網」と呼ぶ開コオロギに用いる網と同じものである。今でも、柄が長く金属の糸をつけた「罫」が、寧津では売られているが、コオロギが入ったときに、なかが見えにくく、さらにコオロギが飛び跳ねたときに傷みやすいため、最近ではナイロン製の「罫」が主流になっている。



写真1：コオロギを探すコオロギ捕り



写真2：コオロギを選別するコオロギ捕り

この網と、コオロギのいそうな場所を掘るため道具を、コオロギ捕りは必ず携帯する。これは金属でできていて、先端が鋭く尖っている長さ三〇センチメートルほどのアイスピック状の道具である。これで、石の隙間や、落ち葉のなかを探る。

これらの捕獲具とともに欠かせないのが、ライトである。これは、点灯部分とバッテリーの部分が着脱式になっており、重いバッテリーは袋に詰めて背負う。点灯部分には突起がついていて、コオロギを捕獲するときには両手が空くように口にくわえる。バッテリーは、四〜五時間ほどしかもたないので、時々家に戻って交換してくる。

捕れたコオロギは、一つひとつ白い磁器に入れる。それに、缶詰の底板を切り取ったもので蓋をし、輪ゴムで固定する。捕獲時には、すでにコオロギの入っている容器と空き容器を区別するため、ゴムに草などを挟み、目印とする。容器は、コオロギ用として売られているが、柄を欠いたコーヒークップの半端物を流用する場合もある。この容器に入れたまま、市場で売るので、よいと見込んだコオロギほど、見栄えのよい大きな容器に入れて別にしておく。この容器の底には、土を打ち固めて床を作り、売り払うまでそのなかで飼育する。呉氏はこの容器を、一晚に一〇数個しかもち歩かないが、このすべてにコオロギが入ることは滅多にない。なぜならば、呉氏は時々捕れたコオロギをセレクトし、小さいものを捨てていくからである。

寧津のコオロギ捕りたちは、コオロギを捕る際に、ほとんど大小にしかこだわっていないといってもよい。後述するように、コオロギ商人や、コオロギを飼育する都市民などには、その良し悪しの判断に複雑な体系があるのに対し、生産地の人々はそのような知識はもち合わせていないのである。コオロギ捕りは、遠目にこれはと思うコオロギをみつけると、網ですくいあげ、ライトを口にくわえて、網のなかのコオロギを凝視する。その時点では、大きいという

価値判断のみが働き、小さいと感じたコオロギはすぐに放される。大きいと感じると、先に捕っておいたコオロギと比較して、残すか放すかを決断する。後から捕れたものが大きい場合、先に捕れたコオロギは貧弱にみえるので、往々にして放される。みつけたコオロギをすべて片っ端から捕獲して、売るわけではないのである。彼らの捕獲から売却まで至る知識には、このコオロギの大小という価値判断が大きな意味をもっている。

呉氏のコオロギ捕りのグループは、二〜三時間おきに誰とはなしに集まって、休憩する。その休憩の時間が、さらに選別の機会となる。地面に車座になって、コオロギの入った容器を並べ、お互いに獲物をみせ合う。大小を比べ合い、明らかに仲間のものより小さいときは、すぐに捨て去る。こういう選別が何回となく行われるため、最終的な獲物の数は多くとも二〇匹を越えることはない。

さらに呉氏たちは、朝方近くなるとコオロギ捕りの仕上げに、大物のコオロギへと照準を絞る。村を何巡かして、もう、だいたい村中をまわり尽くしたとなると、三人は集まって、トウモロコシ畑の縁に向かう。トウモロコシ畑は捕りにくい、餌が多いので大きなコオロギがいると考えられている。このときばかりは、散開を止め、協力して捕る。今までつけていたライトを消し、足音を立てるのにも注意するぐらい静かに歩き、鳴き声を頼りに、大きなコオロギを求める。呉氏は、コオロギの大きさを、その鳴き声で区別できるといふ。鳴き声が大きくかすれたコオロギは、たいてい大物で、一方、尖ったような甲高い鳴き声のコオロギは、往々にして小さいという。畑の縁をたどりながら、目当てのコオロギの音色を求め、これはと思うと、数分間、はやる気持ちを抑えて、静かにその音色に耳を傾ける。音から、いる場所をだいたい推測し、三人一斉にライトをつけて捕りにかかる。トウモロコシ畑は、障害物が多く、一度畑の奥に入られると踏み込めない、全員が素早く探す。ここで大物を仕留めると、一日の稼ぎが数倍になる

と考えられている。

このような体の大小に収斂した判断基準は、個体の識別にも影響を与えている。もともと、売却用にコオロギを捕獲するコオロギ捕りたちは、すぐにコオロギを手放してしまうのであるから、個体識別を行う必要はほとんどない。せめてあったとしても、「もつとも大きいコオロギ」と「それ以外」といった区別しかもっていない。これは、都市のコオロギ商や愛好家が、「品種」という形で体系だった個体識別を行っているのとは対照的である。

寧津において、コオロギの一般総称は、北方方言と同じく「チウイチウイ 蚰蚰」である。狭義に、關コオロギ用に捕るコオロギも「チウイチウイ 蚰蚰」と呼ばれている。この關コオロギ用コオロギは、昆虫分類学上、ツツレサセコオロギ属 (*Velarifictorus* 属)⁽³⁾ に分類される。これ以外にも、寧津にはエンマコオロギの仲間や、ミツカドコオロギの仲間が生息し、それぞれ「油葫蘆」、「棺材頭」と呼ばれているが、關コオロギには用いられないので、商品価値はない。そのため、コオロギ捕りたちは、これらのコオロギが山野にいくらいても見向きもしない。

一般に、都市部においては關コオロギ用のコオロギは、多くの「品種」に分けられ、さらにその形態や容姿で細かく分類され、評価される。そして、その評価が、都市におけるコオロギ価格の高低に大きな影響を及ぼすので、無視できないものとなっている。また、都市部では、そのような基準をもとに、自分の保有しているコオロギの個体識別を行っている。しかし、生産地である寧津の農村部には、そのような細かく体系化された分類は存在しないのである。

呉氏も、コオロギの「品種」に関する知識は、保持していない。生産地において、あるいは捕獲者にとつて、コオロギ一匹一匹には個体性を見いだすことは少なく、それぞれのコオロギの差異、優劣を明確にすることに関しては非力であるといえる。しかし、それでも彼らとコオロギとの関わり合いのなかでは、齟齬をきたすことはなかったし、

不便さを感じることもなかったのである。コオロギをもつて興ずることのない彼らは、ただ捕獲者の知識、技術を保持すればよいのであつて、その方面においては細かな知識や技術を保持しているといえる。売ることを考えれば、その才の発揮される範囲は、山野での獲得ばかりではなく、それをコオロギ商に売りわたすところまで拡張されてもよさそうなのであるが、明らかにその部分は、都市の消費文化とは切れている。あくまで、彼らは、山野からコオロギを見いだす人々として存在しているのである。

コオロギ捕りは、夜明け前に家に帰り、最後の選別を行う。普通ならば、だいたい一〇匹程度を残し、あとは逃がす。試闘を行うこともあるが、その際、都市の關コオロギのように特別な道具を用いることはないし、闘技も心得ていない。単に、捕獲時に用いた小さなコオロギ容器に二匹を入れてみて、あたりに生えている草の茎をほぐしたもので刺激し、対戦させてみるだけである。おおまかな力量の差を見極めるが、これはコオロギ商に売りさばくときの書き程度にしかない。しかし、コオロギを買い求めて都市からやつてきたコオロギ商や、關コオロギ愛好家は、その程度の判断材料では、コオロギを選定、購入することはない。

呉氏は、一匹三〇〇元(約四、五〇〇円)でコオロギを売ったことがある。ただ、このような上玉に出会うことは滅多になく、せいぜい、一晚に七〇元ほど稼げばよいほうである。悪いときは、売り物になるコオロギがまったく捕れないこともある。毎年、一シーズンで二、〇〇〇元ほどの稼ぎになるといふ。この値は、一九九五年の山東省農村部における人口一人あたり年平均収入が、一、七一四・五元〔中華人民共和国農業部 一九九六・三〇一三一〕であることからすれば、畑作以外にこれといった産業のない農村部において、十分に意味ある金額であることがわかる。

呉氏らは、コオロギ捕りから家に帰り選別が終わると仮眠して、早朝にはすぐにコオロギ売りに出かける。彼らは

たいいて、S村のなかに間借りしている天津からきた二人組のコオロギ商へ売る。そこで売れなければ、他のコオロギ商がまわってくる、幹線沿いの村の入り口で露店売りする。また、近在の郷や鎮で行われる「大集」と呼ばれる定期市でも売ることもある。そういうときは、だいたい妻が代わって売りにいく。夜のコオロギ捕りは、昼間はコオロギ売りへと変わらねばならない。

4、コオロギを選び出す人々

寧津では、県内至るところにコオロギ市場が立つ。寧津の県城にも、中心道路の脇にコオロギ売りが数一〇人ほど集まるマーケットが毎日形成されるが、とくに常設の店を設えるわけでもなく、ただ路上にコオロギの入った容器を並べているだけである。自然とこの場所に人が集まり、コオロギの売買が行われるという感じで、それほど活況を呈していない。コオロギ市場のコオロギ売りは、老若男女を問わず様々な人が行っている。小学生程度の少年の姿もみられる。女性も多くみられ、その数は男性よりも多いときもある。彼女らは、自分で捕ったコオロギ以外にも、家族が捕ったコオロギを合わせて売りにきているのである。

もつとも盛況なコオロギ市場は、郷鎮単位の市場である。尤集郷、杜集郷、孟集郷、柴胡店鎮などで開かれるコオロギ市場は有名で、コオロギを買い求めるコオロギ商や、コオロギ売りで賑わう。とくに、これらの郷鎮で「大集」が行われるときには、隣県の人々も集まり大規模なコオロギ市場が立つ。「大集」は、もともとコオロギ専門市ではなく、日用雑貨品から食品、衣類、農具など生活に必要な物資を売買する市場である。人の多く集まる機会に合わせて、

コオロギ市場が形成されるのであって、八月から九月にかけては、コオロギ売りがほとんどの場所を占領しているといつても過言ではない。コオロギ売り、とくに女性のコオロギ売りは、ここでコオロギを売り、得た現金ですぐに日用品や衣類を買い求めていく。また、「小吃店（露店の飲食店）」で、楽しんでいく。さながら、縁日のようである。

尤集郷は、県城から西へ二〇キロメートルほどのところにあり、農曆で四、九のつく日に「大集」が行われる。寧津では尤集郷の「大集」のコオロギ市場が、よいコオロギが出ることでその名が知れわたっており、コオロギ商やコオロギ愛好家が多く集い、それ目当てのコオロギ売りも集まってくる。尤集郷の「大集」のコオロギ市場には、一、〇〇〇人近くのコオロギ売りの農民が集まる。コオロギを買い求める人も多いが、明らかに売り手がそれ以上に多い。

コオロギ売りには、二つのタイプがある。ひとつはコオロギ市場となる路上に、自分のコオロギ容器を並べ客を待つやり方である。これは楽なやり方であるが、他の物売りも店を出しているので、場所を確保することがなかなか難しい。遅れてきた者のなかには、すでに陣取っている者の前面に荷をほどこき、売りはじめる連中もいるから、場所によつては、コオロギ売りが二列、三列になつている路地もある。こういうときには、往々にして、場所をめぐつて口論となる。コオロギ売りのもうひとつのやり方は、袋にコオロギ容器を詰めて、コオロギ商とおぼしき人々に声をかけながら、振り売りするやり方である。これは、疲れるけれども場所取りを行う必要もなく、かつ買手に自分で近づけるため効率がよい。ただ、もち歩くことのできるコオロギの数は、定点式の売り方に比べ少なくなる。

尤集郷へは、中国各地から人が集まる。一九九〇年には、八月の一ヶ月で二、〇〇〇人以上もの県外のコオロギ商がこの尤集郷に集まり、一日一万元以上もの取引が行われていた。尤集郷の陳庄村などには、村内に八カ所もコオロギ市場ができ、一シーズンで七万元以上の収益をあげたという「孟 一九九七・九」。近年、さらにその盛況さを増して

いる。

地元の農民であるコオロギ売り、都市からきたコオロギ商・コオロギ愛好家は、身なり風体から容易に区別がつく。一九九八年八月時点では、確認できただけでも山東省の省都済南はもとより上海、天津、北京、杭州（浙江省）、西安（陝西省）、南京（江蘇省）、武漢（湖北省）、広州（広東省）などからコオロギ商・コオロギ愛好家がきていた。いずれも大都市である。そのなかでも、上海からやってきた人々がもっとも多い。北京や天津など北の人々は、コオロギに関して「天津は老祖宗（先祖）、上海は孫子（子孫）」と自分たちの育んできた、關コオロギ文化の歴史性を自慢するが、中国第一の経済都市上海からやってきた人々の購買力には、最近いささかおされ気味である。

この産地に外部から訪れる人々は、その多くが都市のコオロギ商である。また、なかには、商売ではなく自分で飼育させるコオロギを買い求めにきたという愛好家もいる。しかし、彼らの買いつけるコオロギの数は、自分で消費するにはあまりにも多い。実際は、そういう人も、自分で買って帰ったコオロギの何割かは、知人などに売り払うのであり、コオロギ商とコオロギ愛好家は、ここでは紙一重である。また、こういう生産地にまで直接赴き、気に入ったコオロギを買いつけていくコオロギ愛好家は、とくに「熱心な人々」で、一般の都市のコオロギ飼育者は、コオロギ商が都市へともたらしたコオロギを購入するのが普通である。そして、「熱心な人々」のなかには「上海蟋蟀研究会」など、いわゆる合法的競技団体の人々も見受けられるが、そのほとんどはプロのコオロギ賭博師と考えてよい。

關コオロギを「趣味」でやっているという四〇歳過ぎのある男性は、同業者と二人で西安からきている。彼らは、七月二五日に寧津入りしたというから、もうかれこれ一ヶ月ほど滞在していることになる。彼らは、毎日コオロギ市場にいつては、気に入ったコオロギを買いつけ、知人に託して西安まで送っているという。この四〇歳過ぎの男性は、

今年買ったなかでもっとも高いコオロギに、一、三〇〇元（約二万円）もつき込んだという。彼は、毎年、この尤集郷を訪れており、顔見知りが多い。今回も、馴染みの農民の家を訪ね、一、三〇〇元もするコオロギを直に選び購入した。もし馴染みでなければ、二、〇〇〇〜三、〇〇〇元は、ふっかけられたであろうという。

彼は、昨年もこの農民から、「黄大頭」という「品種」のコオロギを購入している。そして、そのコオロギが、優秀な成績を残したので、今年もまた取引を行ったのである。昨年購入したコオロギは、あまりにも強いために西安では敵なしとなった。そのため、一儲けしようと上海へ出て賭場へ出向き、しめて八万円ほど稼いだという強者である。このコオロギをみると相手は逃げ、勝負がすぐについてしまうので「覆盆（コオロギの容器にすぐに蓋をするの意）」とあだ名されるほどであった。彼のように名うてのコオロギ愛好家の周りには、コオロギを高値で売り込もうとするコオロギの振り売りが人垣を成す。

このような名うてのコオロギ愛好家のひとりに、王敬文氏（仮名）がいる。一九五七年生まれの彼は、上海市の中心、廬湾区に住んでおり、生粋の上海っ子である。彼は、九歳の少年時代から關コオロギをみようみまねではじめ、文化大革命中も止めることなく、三〇年以上關コオロギを続けている。コオロギに関する知識や技術は、このような経験のなかで学んできたものであるが、他に書物なども繙き積極的に研究している。現在でも、多くの關コオロギに関する指南書が出回っているが、彼は最近の書物には否定的である。それには、経験的な裏づけが少ないという。それに対して、古く宋や明、清の時代に編纂された書物は、長い歴史のなかで経験豊かな人々が書いたため信頼できるという。意外なことに、賈似道の『促織経』二巻など古典類も参考にしているというから、彼の研究熱心さは侮れない。

彼は、上海から仲間三人で山東省德州へ赴き、そこで地元の知人と落ち合い、連れだつて八月十九日にこの寧津へとコオロギを買いつけにきた。王氏ともう一人の上海人は、実はプロのコオロギ賭博師、もう一人の上海人は「個体戸(白営業)」の経営者である。このグループのなかでは、年の頃からいつて王氏は若いほうではあるが、明らかにリーダ格であり、実質的な品定めや値段交渉は、他の者が買う分までほとんど彼が行っている。

コオロギ商や、コオロギ愛好家は購入する時期にこだわる。早すぎるとまだ成長しきっていないので優劣の判断が難しい。一方、遅すぎると優劣の判断はつきやすいが、その分価格も高くなっている。八月初中旬から下旬の処暑までに捕られたコオロギを「第一批(第一陣)」、処暑から九月上旬の白露までに捕られたコオロギを「第二批(第二陣)」、それ以降を「第三批(第三陣)」と区別するが、王氏は「第三批」は衰えたコオロギが多いということで、この時期に購入しないという。それで、「第一批」と「第二批」を跨るように、この寧津へと訪れた。

彼らは、尤集郷では、食堂をやっている家の一室を間借りして滞在している。複数人できているため、旅館に泊まるより割安である。その分、自炊せねばならないが、治安面でも普通の家のほうがよい。寧津周辺は、コオロギ景気にわく分、それをめぐる犯罪も増えているという。大金をもって都市から人々がやってくるのであるから、それを狙った窃盗や詐欺も増加してきた。そのために、コオロギ商やコオロギ愛好家は、たいてい数人のグループで行動するのである。

彼らは、一〇日間ほどここ尤集郷に滞在し、一〇〇匹ほど購入したら、上海へ帰る予定である。彼らが買い求めるコオロギは、西安からのコオロギ愛好家とは異なり、すべて自分たちが賭けに使うコオロギである。それに生活がかかっているため、コオロギを選ぶ眼はとくに厳しくなっている。それは、長年の経験をもつ王氏の選コオロギ眼に、

ひとえにかかっている。彼は、一〇日間という時間をフルに使って、じっくりと品定めしていく。拙速に買うことはない。何度も同じコオロギ売りをまわって慎重に品定めをし、値段の下がり具合を冷静に見極めながら買っていく。いかにも買う気満々だったら、いくら闘コオロギ自体について疎い農民とはいえ、ふっかけてくるのは間違いない。

彼は、「草(コオロギを刺激するための道具、「探子」、「茜草」ともいう)」を耳に挟み、座っているコオロギ売りを一つひとつみて回る。一般に、コオロギを買う人々は、値段を先に尋ねて、その後でコオロギ容器の蓋を開け、品定めをすべきであるといわれる。なぜならば、コオロギ売りの言い値に応じた品定めができ、コストを勘案しながら質を見極めることができるためである。また、万が一、品定め中に逃げ出した場合、値段を聞いていないとコオロギ売りから、不当に高い賠償金を請求される可能性があるからである。しかし、王氏は、よほど自身があるのかコオロギ売りに対してまず値段を聞かず、いつも最初に「大不大?(大きいか?)」と問いかける。コオロギ売りは、まず間違はなく大きいと答えるが、実際には、王氏の眼鏡にかなう大きさのコオロギは、ほとんどいない。たいてい、王氏は蓋を開け、一瞥してチツと舌打ちし、他のコオロギ売りへと移る。

王氏も、コオロギ捕りコオロギ売りと同じく、コオロギの大小に最初にこだわる。これは、賭博に用いる場合、大きいコオロギほど掛け金があり、大勝負ができるからである。ただ、普通の農民と違う点は、何でも大きければよいというのではなく、大きくかつ品質のよいコオロギを選んでいることである。彼は、のちほど詳述するコオロギの「品種」や「相法」に関して熟知しており、その闘い具合や、優劣を判断できる。時々、同行の地元の知人に、「品種」名や、特徴の良し悪しを解説している。「品種」に関する知識と、それを見極める技術は、熟練した闘コオロギ愛好家ならば、誰でも身につけているという。そして、それぞれの愛好家には、各自好みの「品種」があるという。

そのため、知識は同じでも、求めるコオロギには違いがある。この違いが、賭けの時点では、自分の好みの「品種」への思い入れを生み、賭けに、より一層のめり込ませることになる。ちなみに、王氏は、「真青」という「品種」を好むが、すべての人がこれを好むとは限らないという。

それぞれの「品種」の名前は、多くのコオロギ商やコオロギ愛好家たちに、コオロギの容貌や固有の闘い方、癖など行動のパターンを思い起こさせるインデックスとなっている。さらに、このインデックスから、その「品種」が今まで闘ってきた戦歴が喚起される。何年前のどこそで誰々がこの「品種」で闘い、勇猛果敢であったとか、五連勝したなどという物語が付与されることにより、コオロギ購入時における「品種」の力量判断の重要な尺度となるのである。残念ながら、このような尺度は、コオロギを捕ったり売ったりする農民たちはもち合わせていない。

王氏は、ちよつと気になるコオロギがみつかると、おもむろに耳に挟んでいた「草」を手にして刺激してみる。見事な手さばきで、微妙な振動をコオロギに伝える。この動作の巧拙で、コオロギ売りに足下をみられるかどうかが決まるといふ。彼は、全体的な大きさとともに、闘いに大きく影響する牙の大きさ、形を詳細にみていく。彼の観察中、売り手は盛んに売り込もうと能書きをまくし立てるが、彼はそんな言葉にはまったく耳を貸さず、ただ自分の判断基準でコオロギを選り分けていく。コオロギの取り扱いも丁寧で、手慣れたものである。

こうやって観察したコオロギも、たいていは売り手に突っ返されることになる。また、本当に気に入ったコオロギをみつけると、ようやく値段を聞くが、たいていは高くふつかけてくるので、その場は値段交渉もせず、「高い」と一言残して立ち去ることが多い。そうやってじらしておけば、次にまわっていったときに、コオロギ売りは必ず値を下げてくるという。そのため、彼は、なんの興味も示さぬように振る舞って、あっさり立ち去る。しかし、のちは

ど仲間には、こつそりと「どこそこによいコオロギがいる」と伝え、記憶しておくのである。

こういう買い方をする、最初のうちはなかなか数を集められない。王氏は買いつけの初日の午前中には、四時間ほどまわって三、〇〇〇匹以上のコオロギを品定めしたが、実際に買ったのはわずか二匹にとどまった。先行してまわっている仲間が、「これはどうだ？」と、相談しにもつてくるが、欠点を指摘され、すぐすごともち帰る。あくまで、判断は王氏に一任されているのである。王氏が休憩していると、周りは売り込みの振り売りで人だかりになった。

そもそも、野生にいるコオロギには値段がない。普通に、山野に転がっているものなのであり、闘コオロギを売るものなわけは、本来、価値など

ないものなのである。むしろ、農業からみると、トウモロコシを食べる害虫でもある。しかし、商品として立派に意



写真3：コオロギ商に売り込むコオロギ売り

味をもつようになった今、農民たちはコオロギに値段をつける。ただ、その値段のつけ方は、コオロギ自身の評価と必ずしも結びついていない。あくまで、コオロギ捕りコオロギ売り自身が、売りたい、稼ぎたいという値段に過ぎないのである。先にも述べたように、彼らは、せいぜい大小で良否を判定しているだけである。買い手側の評価基準には通じていないため、その価格の妥当性は至って怪しくなっている。その意味で、農民たちによって、山野から離脱されたコオロギは、未だ野生から離脱されていない。未だ単なる生身としてのコオロギなのである。

一方、都市からきたコオロギ商や愛好家は、様々な大きさ、品質、「品種」の違いによる価値の違いを認識している。地方のコオロギ市場には、何万、何一〇万というコオロギがひしめき合っており、自分で山野に足を運ぶより効率的にコオロギに出会うことができる。しかし、そこにいるコオロギのほとんどは、彼らが求めているような優れたコオロギではなく、ただの駄コオロギである。この圧倒的に多い駄コオロギのなから、優秀なコオロギを選び出すとき、野生の生き物のなからその才能を見いだす慧眼が、ここに発揮されている。その意味で、コオロギ売りと、コオロギ商・愛好家たちとは、同じコオロギをみつめていても、別のコオロギの姿がみえているといつてもよい。

5、コオロギをもたらず人々

このような、コオロギ商やコオロギ愛好家たちの選抜を経て、一部のコオロギが都市へとやってくる。そこで、未だ草味なコオロギたちは、自分たちの生まれ育った山野とはかけ離れた生活環境を与えられ、まさに新しいコオロギへと「脱皮」させられる。

都市において、コオロギたちが最初のたどりつくのは、花鳥魚虫市場である。

花鳥魚虫市場は、その名の通り盆栽、切り花などから金魚、観賞鳥まで所狭しと並べられた市場である。中国の都市部には、花鳥魚虫市場は必ずあるといつてよい。上海にはこのような市場が南浦大橋下や昆明路、江陰路、曹安路、長海路など数カ所ある。夏も終わりに近づくと、コオロギ商とそのコオロギを買い求める人々でこった返す。

現在、上海で最大のコオロギ市場が開かれるのは、上海文南花鳥魚虫市場である。文南花鳥魚虫市場は、上海市の南区、南浦大橋のループ高架下に設けられている。ここは、同じ南区の文廟花鳥魚虫市場が、再開発のために一九九八年初頭に撤去されたのにもない、開設された。それ以前は、上海の下町、旧上海城内の文廟の脇にあった文廟花鳥魚虫市場が、上海でもっとも著名なコオロギ市場であった。寧津尤集郷にコオロギの買いつけにきていた王氏も、この文廟花鳥魚虫市場を拠点にしていた。

文南花鳥魚虫市場には、普段は、盆栽屋や小鳥屋、金魚屋なども開店しているが、コオロギのシーズンである八、九月は、まさにコオロギ一色。ほとんどの場所を数百人のコオロギ商が占領している。この市場には、闘コオロギに熱中する上海っ子はもちろんのこと、台湾や香港、マカオなどからも熱狂的な闘コオロギ愛好家がやってくる。

このコオロギ市場で、コオロギを売っているコオロギ商は三つのタイプに分かれる。

まず第一に、生産地の人が直接上海にやってきて、自分の捕ったコオロギや、別のコオロギ売りから仕入れたコオロギを売るコオロギ商である。コオロギ商といつても、先にみてきた農民のコオロギ売りとは別に大きな違いはない。そのあか抜けない身なりから、上海以外の農村部からきたことは一目瞭然である。前章で紹介した、山東省寧津にも、こういう都市での売買を目的として、コオロギ取引をする地元民がいる。尤集郷のコオロギ市では、自らコオロギを

關コオロギからみた中国漢人都市民の自然観

売つていながら、同時に別のコオロギ売りから買い取っているコオロギ売りがいた。彼は、その買い取ったコオロギを、そこにいる都市からきたコオロギ商や、愛好家たちに転売することを第一の目的としている。しかし、そこで捌けないと、自分で捕った分も合わせて、さらに高値のつく都市へとコオロギを自ら携えて赴くのである。

上海では、このタイプのコオロギ商は、浙江省紹興からきた人々が多い。紹興は上海に近いため、一般の農民も容易に訪れることができ、また、女性も気軽に参加できる。他の地域からきているコオロギ商は、そのすべてが男性といてもよいが、紹興産のコオロギを売るコオロギ商は、半数近くが女性である。紹興産のコオロギは、かつては人気があったが、今では寧津、寧陽などの山東省産におされて、その人気にも翳りがある。したがって、安価なコオロギが多い。売買、値段交渉のやり方は、寧津で行われていたやり方と大差はなく、たいてい、コオロギ商は、自分の望む金額をまず提示するが、この額に根拠があるわけでもなく、最終的には五〇元ほどで売り払う。彼らの、コオロギの取り扱いに至っては至つてぞんざいで、コオロギを大切に扱う愛好家からすれば、危なっかしくてみてられない。

紹興からのコオロギ商の特徴に、コオロギを入れた竹の容器があり、それをみればすぐに紹興コオロギ商と識別できる。普通、コオロギは、小さな磁器に入れられるが、紹興産のコオロギは、細い竹筒に入れられている。竹筒の両端は、綿で蓋がしてある。コオロギを取り出すときには、この綿をはずして、その口に網を当てて、膝に打ちつけるようにして取り出す。そのため、コオロギは網のなかに強く投げ出される。都市のコオロギ商に限らず、都市のコオロギ飼育者たちは、非常に慎重にコオロギを取り扱う。それは、丁寧な扱わないと、コオロギの足や触覚が容易に傷み、体が傷み、その価値がなくなってしまうからである。通常、手で直接コオロギに触れることは忌まれ、そのため様々な道具が開発されているほどである。そのような注意深さは、明らかに紹興からきたコオロギ商には欠けてい



写真4：紹興からきたコオロギ商



写真5：寧津産のコオロギをもってきた都市のコオロギ商



写真6：名虫の入った「蟋蟀盆」

紹興からのコオロギ商は、その売り方、売り物においても特徴的である。たいていの紹興コオロギ商は、竹筒を五本ずつゴムで縛り、まとめ売りをする。まさに、「十把ひと絡げ」で売っている。そこに、個体の良し悪しといった情報は存在しない。さながら、コオロギの大売り出しである。また、彼らは、特異的に「三尾子(三妹子ともいう。メスコオロギ⁶)」を多く売っている。闘コオロギは、もちろんオスコオロギで行う。メスは闘コオロギに参加しない。しかし、のちほど述べるようにオスが闘う上で、交配用メスが重要な役割を果たすため、熱心な愛好家たちは、メスも飼育している。そのような人目当ての売買である。しかし、やはりメスはオスに比べ安く、これまで五把ひと絡げで売られ、普通はせいぜい一匹一〜二元程度にしかならない。安価であるが、紹興は上海に近いため交通費などのコストがそれほどかからないことから、このようなおおまかな売り方でも十分やっていけるのである。

寧津からきたというコオロギ商にも同様に、大胆な売り方を

する者がいる。口径五〇センチメートル、深さ六〇センチメートルほどの大きな竹籠に、数百匹のコオロギをまとめて入れ、口を布で覆い、客になかのコオロギを選ばせて売るやり方である。しかし、このような売り方は、至って少数で、こういうコオロギ商のもつコオロギは、本格的に闘コオロギを行う眼の肥えた人々からは相手にされない。費やす金の少ない愛好家が、やむをえず掘り出し物探しを行う程度である。

このような生産地からきたコオロギ商に混じって、都市のコオロギ商も売っている。これが第二のコオロギ商のタイプである。彼らのなかには上海人もいるが、天津や北京、杭州などよその都市からきた者も少なくない。そのほとんどが、一攫千金を求めて短期的に上海へと集まってきた者たちである。しかし、農民からできるだけよいものを安くで仕入れ、眼の利く都市の愛好家にできるだけ高く売るのであるから、闘コオロギに関する十分な知識と、経験をもった人々である。彼らの関心は、第一に売値の高低であるといってもよいが、その選コオロギ眼は一般の愛好家に劣ってはいない。海千山千の商人たちである。

コオロギは、産地と新鮮さが重要視される。そのため、近場で仕入れたにもかかわらず、人気のある産地の山東省産とする、いわゆる偽ブランドコオロギを売る不届きな輩もいるという。コオロギ商は地面か、あるいは台の上に持参したコオロギを容器のまま所狭しと並べ、「たった今到着、寧津虫」、「卸値優遇、山東大虫」などのキャッチフレーズを書いた黒板や、張り紙を背にして口上をまくし立てる。足下には、コオロギを運ぶ薄汚れた旅行バッグが転がっており、なかには並べきれないコオロギや、上客目当てのとおきのコオロギが潜ませてある。金をもつていそうな客、あるいは上物を探している客をみつけると、恭しくもつたいてこのバッグから取り出し、売りつける。なかには、入れ墨を背中や手足に入れた、風体よろしからぬコオロギ商もいるが、上海っ子は気後れすることなく、丁々

発止と駆け引きしている。これらのコオロギ商は、自分自身が闘コオロギ経験者であり、あるいは現役の愛好家であり、都市のコオロギ愛好家もつコオロギに対する知識や技術を同じくもっている。そのため、コオロギ市場の所々では、そういう人々と愛好家たちの間でコオロギ談義が交わされる。普通の愛好家は、だいたいこのようなコオロギ商と交渉して、コオロギを買い取るのである。

コオロギ愛好家たちの品定め、買い方は丁寧である。コオロギの入った容器の蓋を一つひとつそつと開けては、その力量を見極め、品定めする。蓋を開けるとコオロギが跳び出す場合があり、注意しなければならない。ただでさえ足の踏み場もないほどの人混みである。見失ったり、踏みつぶされたりすることもある。そんなときは当然賠償金ということになるから、俄然品定めは慎重になるしかない。数年前に不注意のためにコオロギを逃がした者がいたという。ふとした隙に逃げられてしまったのだが、コオロギ商はたまったものではない。嘘か真か、その虫は今年の「虫王(名コオロギに与えられる称号)」の一匹だったらしく、五〇〇元賠償しろと迫ったらしい。談判のすえ、一〇〇元あまりを支払うことで落ちついたそうであるが、こんなもめ事は初秋の花鳥魚虫市場では日常茶飯事である。

コオロギを吟味する人は、手に「草」をもち、これでコオロギの頭や触覚をくすぐって、その反応をみる。値段が馬鹿にならないから、買い手は真剣そのものである。たいていの上海っ子なら、コオロギに関しては一家言もっており、海千山千のコオロギ商とはいえ、そう易々と売り払うわけにはいかない。凝った人にもなると、体の大小、頭の形や色、襟首の広さ、肉づき、足の長さや太さ、牙の形など二〇数カ所ものチェックポイントがあるというから、それを確認するだけで一匹あたり一〇分や二〇分はゆうにかかってしまう。コオロギ商も必死に売り込もうと、あの手この手を駆使する。今朝、山東からついたばかりで、新鮮で元気なコオロギを売っていることを証明するために、自

分の乗ってきた汽車の切符を、台の上にディスプレイする者もいるほどである(写真5)。

よそからきたコオロギ商は、花鳥魚虫市場内の、少し空いているスペースに荷を並べる。これとは異なつて、常設の店を構えているのが、第三のコオロギ商のタイプである。花鳥魚虫市場のなかには、間口二メートルほどの小さな店が配置され、通常時は、コオロギの道具などを売っている。コオロギシーズンになると、そこを使ってコオロギも売るのである。彼らの、コオロギの取り扱いはコオロギ商のなかで、もつとも丁寧である。そして、かなり本格的にのめり込んだ「虫迷(コオロギマニア)」を対象に商売をしている。それは、取り扱いコオロギがすべて名虫ばかりで、高価なものばかりを揃えていることから理解される。

こういう本格的な店のコオロギ商は、自分で産地に足を運び、これぞと見込んだコオロギのみを少数買ってくる。したがって、品揃えからいえば、一般のコオロギ商より少なめである。それに、一般のコオロギ商が使うような簡易的な容器ではなく、コオロギ愛好家が飼育時に使用する本格的容器「蟋蟀盆」を入れて、店先に並べている(写真6)。そして、「盆」の蓋や、宣伝用の黒板に「品種」名や値段、産地などをはっきりと書いて、どういうコオロギがいるかはっきりと明示している。なかには、体重までも細かく記すコオロギ商もある。

彼らには、寧津に赴いていたコオロギ賭博師王氏と同様に、闘コオロギに関して卓越した識見をもつ人が多い。「品種」名を諳んじることなど朝飯前である。彼らは、同じような闘コオロギに対する炯眼のもち主には、その蘊蓄を傾け、もっているコオロギの子細を教えるが、無定見な者に対しては、相手にもしない。また、彼らは、コオロギの金額をあらかじめ明示し、その値段に対する根拠をもっている。そう簡単には値引きに応じない。他のコオロギ商が、駆け引きで値段をあげようとしているのとは対照的である。玄人受けする店には、本当に逸品、珍品が並び、普

通のコオロギ愛好家には、とても手が出ない値段で売られている。ときには、「異虫類」と呼ばれる奇形のコオロギなども並べられ、買わなくとも珍しいコオロギを見物する人で賑わう。実際、見物料をとるコオロギ商もいる。

花鳥魚虫市場では、コオロギ一匹安いものは五元程度で、産地価格と大差ないが、そのようなものはせいぜい子供の遊びに使われるのがおちで、たいいていの大人は一〇元から一〇〇元のコオロギを買い求める。友人受けする店のコオロギはもつと高く、二〇〇元から五〇〇元のコオロギを店先に並べ、店の奥には、さらに高価な強者が揃えてあり、上得意の客相手に商売をしている。一九九八年八月、文南花鳥魚虫市場において、ある店の宣伝用黒板には、「山東臨清蟋蟀」と産地が書いてあり、さらに「白牙青・五〇〇元」、「紅牙青・三〇〇元」、「異翅・二〇〇元」（ちなみに、これは羽が奇形の「異虫類」である）、「金背督・五〇〇元」、「黄大頭、深色・三〇〇元」と破格の高値が並んでいた。表の市場には流れてこないが、一万元にも達するコオロギもあるといわれている。こういうものは、金持ちか、プロの闘コオロギ賭博師の間で売買されるものである。都市民の平均月収が八〇〇〜一、〇〇〇元であることからすれば、とつもなく法外な値段であることが理解できよう。それでも、買う人がいるというから、上海での闘コオロギ熱は推して知るべしである。

各産地で捕らえられたコオロギたちは、その産地の市場で選抜される。そして、目利きたちのひしめく都市の花鳥魚虫市場では、さらに厳しい眼で厳選され、序列化される。もちろん、駄コオロギも一部迷い込むことはあるが、それはそれで釣り合った消費者がいる。それ以外のコオロギは、「品種」と品質によつて適切な価格を与えられて、ランクづけされる。価格はコオロギの優劣をあらわす尺度であり、優れた名虫であればあるほど、与えられた地位に疑いはない。都市ではコオロギが、ひとつの体系のなかに位置づけられているのであり、玉石混淆のコオロギが、売り手推して知るべしである。

6、コオロギを位置づける人々

中国において、コオロギに関する分類学的、生物学的な分類は、厳密に完成されているとはいいがたい。それに比べ民俗的分类は、驚くほど微細で体系的である。

すでに述べたように、コオロギ売買の際、産地が、その質を見極めるファクターになるが、それ以外に重要視されるのは民俗的に分類される「品種」分類と、外貌からの判断する「相法」に基づいた優劣判断である。「品種」という言葉は家畜でいう「品種 (breed)」のように、ひとつの種のうち形質により他のものと区画され、それが遺伝的に固定された集団を指し示すものではない。それゆえ「品種」とは呼ぶのは本来不適當であるが、コオロギを売買するとき売り手や買い手の間で頻繁に「品種」という言葉で語られるため、この語を用いることとする。闘コオロギに詳しい「上海蟋蟀研究会」理事長の辺文華氏によると、その分類と優劣判断は以下のようになる。

辺氏は、コオロギをまず大きく「一般のコオロギ」と、それ以外の範疇である「一般でないコオロギ」との二つに分けて把握している。とくに両者のカテゴリーの名称はないが、「一般でないコオロギ」は「異虫類」と総称されることもある。「一般のコオロギ」とは、闘コオロギを行う人々が、経験的に見慣れた身体的な特徴（体の大きさ、構造、

色など)を有するコオロギで、一般でないコオロギはそれから逸脱するコオロギを範疇化したものである。両者の境界は、経験的に導き出されているようで、關コオロギの門外漢には、理解は容易ではない。

辺氏は「一般のコオロギ」を、全体的な基調となる色で青色類、黄色類、紫色類、紅色類、白色類、黒色類の六つにさらに分類している。この色という尺度に基づく分類が、感覚的で曖昧である。たとえば、青色類の色は普通の色彩の青ではなく、頭や襟首、羽、腹部の褐色のなかに青みがさすというコオロギで、その判断は簡単ではない。また、青みがはっきりしているものほどよいコオロギとされる。紫色類は、当然紫を基調とするが、色の深いものはナスの皮のようであり、浅いものはマイカイ(ハマナスと訳されることが多い)のようであると喩えられる。その色がみずみずしく淡いものがよく、ひねた濃いものはよくないという。まずもって色を特定するのが難しいのに加え、色彩をさらに詳しく表現する際の「はつきりした」とか「濃い」、「艶がある」、「厚みがある」などの表現がさらに理解を困難にしている。その色ですら、時間とともに変化することがある(たいていは濃い色から薄い色に変わるといふ)というから、扱う時期によっても判断基準を変えなければならない。素人には、本当に分類できているのだろうかと思いたくなる。

色で見分けのつきにくいときは、その鳴き声や動き具合などを加味することにより区別すればよいという。しかし、それとて、青色類の声の調子は強く、低音でよく通り、広くて厚く、動きは従容として迫らぬものがあり、その歩みは落ちついて力強いなどと、これまた非常に感覚的であり、余計にわからなくなるのである。

それぞれ色で分類された後に、各部位の色の組み合わせや、より微細な特徴によって「品種」に細分化されている。「品種」とは、コオロギの身体的特徴の表出型を指しているものであり、各部位の特徴の組み合わせで判断される。青色

類などは「真青」、「重青」、「鉄沙青」、「黄頭白青」、「葡萄青」など二〇数種の「品種」があり、その数は各類のうちもつとも多く、かつ優秀なコオロギを多く輩出してきたという。たとえば、「真青」は頭が丸くて青金色がかつたなかに白い線が入っており、羽も青金色、足は丸くて長く淡く白く、体が厚いと解説される。

さて一方、「一般でないコオロギ」は、その外貌の特徴に注目して、形が特殊な異形類、相が特殊な異相類、色が特殊な異色類と三類に分類される。これらもまた、形とか色の感覚的基準によって分類されたものである。まず、異形類であるが、これはその体型が似ている虫や動物、物になぞらえて名づけられている。たとえば、「土蜂形」という品種はアカスジツチバチに、「胡蜂形」はスズメバチ、「螳螂形」はカマキリ、「蜘蛛形」はクモ、「海獅形」はアシカ、「粟核形」はナツメの種に似ているのでこう呼ばれる。異形類は品種名の最後に「形」とつくコオロギが多い。

次いで異相類は、頭や足、羽、眼、触覚など局所的な部位の特徴に注目して名づけられており、その「品種」数は三〇数種ともつとも多い。たとえば、「寿星頭」というと頭部に突起がありこれが黄玉(トパーズ)に似ているためにつけられた。また、「八脚」という品種があるが、これはその名の通り、足が八本あるという奇形で、一戦交えるに大変凶暴であるという評判をもつ。

最後に異色類であるが、これは特徴的な各部位の色彩や、その組み合わせによって名づけられている。「一般のコオロギ」と比較して色の構成、配色の点において「異色」とされているのである。たとえば、「天藍青」という品種は、頭は黒で白い線が入っており、藍色の襟首をもつ。朝みると青だったものが夜みると黄色、晴れの日にみると紫に近く雨の日には白くみえる、というように、その体色は絶えず変化し、定まりがないという。これもまた珍品とされる。

異形類、異相類、異色類などの「一般でないコオロギ」の「品種」数は、「一般のコオロギ」と大差ないが、実際に

市場に出回る数はそれほど多くない。先に述べたように、あつてもたいていは、本格的な愛好家や玄人を相手にしたコオロギ商が売っており、希少価値がある。異形類は比較的凶暴でよい闘いをするため好まれる。異色類は一部を除いて高い評価を得る「品種」はそれほど多くない。異相類は「品種」数が多いけれども、ほとんどが好戦的なよい品種とされている。「一般でないコオロギ」は、その希少性、異形性からいつて名うての「品種」として垂涎的になつていくコオロギが多い。

以上のような分類法にしたいが、辺氏によつて、闘コオロギは九類一三七種にも分けられているのである。確かに、「品種」を分類するにあつて、客観的で明確なカテゴリーは明示されている。だが、それをカテゴライズする基準は、素人目にはかなり感覚的、曖昧に映る。誰にでも一〇〇種以上に分類できるという代物ではない。分類の基準を教えられたとしても、その基準の意味を理解するのに相当の時間を要するであろう。コオロギの「品種」分類は、顕微鏡的な細密な観察を長年続けてきた熱心な闘コオロギ愛好家たちの、経験に裏打ちされた技術なのである。

先にも述べたように、それぞれの「品種」の名前は、多くの闘コオロギ愛好家たちにコオロギの容貌や、固有の闘い方や癖など行動のパターンを思い起こさせるインデックスとなつていく。さらに、このインデックスから、その「品種」が今まで闘つてきた戦歴が喚起される。何年前のどこそで誰々がこの「品種」で闘い、勇猛果敢であつたとか、五連勝したなどという物語が付与されることにより、コオロギ購入時における「品種」の力量判断の重要な尺度となるのである。もちろん、その戦歴はあくまで個体の戦歴なのであつて、厳密にいうと「品種」のものではないが、多く歴戦の勇士を輩出した「品種」は、強いコオロギになる蓋然性が高いと考えられていて、人気もやはり高いのである。

さて、コオロギの質を見極める重要なファクターとして、さらに外貌から判断する「相法」がある。これと「品種」の特性が加味され、最終的な優劣の判断が行われる。「相法」は、古くは「八格」といわれる頭、眼、牙、触角、首、羽、足、腹のそれぞれの部位について特徴を類型化し、優劣を判断するものであつた。たとえば、頭は、トンボに似た「蜻蜓頭」や、真珠に似た「珍珠頭」、ソロバンの珠に似た「算盤珠頭」など一〇数種に分けられる。このうち、「蜻蜓頭」などは、色の分類との組み合わせでいうと、どんなものでもよいとされるが、「珍珠頭」のコオロギは青色類、黄色類、紫色類、白色類でないといふコオロギではないという。「算盤珠頭」に至つては、黄色類のコオロギでないといふコオロギであるとされる。また、さらに頭は視点を變えて、上部にある線（脳綫）という。コオロギの優劣を判断する際のもつとも重要な選択指標）の模様で、「無綫形」、「牛角形」、「羊角形」など一〇数種に分類されている。このように「八格」のそれぞれについて形ばかりでなく、色や模様といったものまで細かく分類し、それと「類」や「品種」の特性を組み合わせることにより優劣が判断されるのである。多くの変数の組み合わせによつて優劣判断、解析の精度を高めようとしているのであつて、最近ではそのチェックポイントが「八格」に八カ所から増えて二〇カ所近くになつていくというから、その難解さは筆舌に尽くしがたい。

以上のような長年にわたる顕微鏡的な観察と、特異的な執着心によつてはじめて体得できるであろう複雑な体系について、はたしてどの程度の闘コオロギ愛好家が完全にマスターし、応用しているのだろうか。市場のなかのやりとりを観察していればわかるのであるが、「品種」に関する問いに対し、的確に答えられるコオロギ商がいれば、よくわかつていないのに適当にごまかしながら売つているコオロギ商もいる。これは、闘コオロギ愛好家についても同様である。したがつて、辺氏のように、複雑な体系を把握し、細かく九類一三七種に「品種」分類のできる人はそれほど

多くはないと思われる。ただし、総覧はできずとも、ほとんどの人が、コオロギに「品種」があり、それによって優劣の差、ひいては価格の差が決まっていることは知っており、長年コオロギ商をやっているのならある程度の「品種」の同定は可能なのである。また、このような知識や技術の多寡が、闘コオロギをやる愛好家や、コオロギ商の優劣の評価につながっていることは間違いない。

この体系について詳しく語ってくれた辺氏は、闘コオロギ愛好家で組織される「上海蟋蟀研究会」の代表者を務め、闘コオロギ愛好家ばかりでなくコオロギ商の間でも博識で通る名士である。辺氏は、このような知識を六〇年近くにわたる闘コオロギの経験と、古くより書き記されている、闘コオロギ指南書、手引書類を博捜することにより身につけた。

辺氏は、一九二五年浙江省紹興の近くの上虞に生まれた。彼は、一三歳から闘コオロギをはじめたという。最初は、コオロギ捕りの最中に大ムカデに咬まれたりして失敗も多かったが、徐々に実力を発揮し、その才が認められ、近隣の地主に雇われてコオロギ捕りとコオロギ飼育を行った。コオロギ飼育については経験がなかったが、この地主がその世話の仕方、餌のやり方、「品種」の識別法など細かい知識と技術を伝授してくれた。彼は、一八歳のときに、上海に出て園芸と農業経営について学び、上海市果品会社に勤務する傍ら、闘コオロギを嗜み、かつ、その研究に余念がなかった。その後、彼は上海郊外の宝山に技術員として下放されたが、その近辺はコオロギに恵まれていたため、内輪で隠れて闘コオロギに興じることができた。

改革開放以後、彼は上海市に戻り、コオロギに関する知見を深めていく。そして、その頃から、コオロギの人工繁殖などにも取り組むこととなる。さらに、一九八八年には、合法的な闘コオロギ活動を発展させるために、彼が唱導して「上海蟋蟀研究会」を組織した。発足当初は、数人ではじめた研究会が、翌年には会員数が一二〇人にもなり、現在では一、〇〇〇人近くまで増えている。

辺氏は、本業の園芸や果樹園経営に関して多くの著作を残しているが、趣味方面でもこの才能が生かされている。彼は、闘コオロギに関する自身なりの知識、技術の体系を新たに位置づけ直すために、『蟋蟀選養與競闘』〔辺 一九八八〕、『蟋蟀経』〔辺 一九九五a〕、『蟋蟀図譜』〔辺 一九九五b〕という闘コオロギ指南書を世に問うている。すでに述べてきた体系は、それらの書物のなかに文字化されており、不特定多数の人々が自由に獲得できる知識として流通している。さらに、辺氏は、「上海蟋蟀研究会」の会報『秋声』の主編を務め、また講習会を通じて、多くの知識と技術を闘コオロギ愛好家へと伝授している。

辺氏の行っている飽くことなきコオロギの分類、体系化は、もちろん優れた「自然」の観察者としての辺氏の資質に帰される部分もある。しかし、このような試みは、かつての中国社会において多くの人にみられたことであるし、現在も多くの人々によって継承されていることであるといつてよい。それは、古くより闘コオロギ指南書が刊行されたこと、そしてその刊行が近年になっても衰えるどころかむしろ盛んになっている——大半は古典の孫引きではあるが——ことからわかる。さらに、その新しい書物のなかにみられる知識の多くが、依然として古書の情報、体系



写真7：上海蟋蟀研究会理事長辺文華氏

を下敷きとしており、それを踏襲しながら、新しい情報を付加する形式をとっていることから、体系化のシステムが伝承されていることは明らかである。コオロギというひとつの昆虫を微細に観察し、それを複雑な体系に位置づける試みは、すでに南宋の宰相賈似道が著した『促織経』に萌芽がみられるのであり、それは現在でも連続と継承、発展されているのであつて、まだ終わっていない作業なのである。

闘コオロギに関する知識、技術はひとつに経験によつて得られるものである。またもうひとつに文字を媒介にして得られるものもある。経験によつて得られた知識、技術のある部分は熱心な人々によつて、文字化されることにより定着しスタンダードとなり、流通していく。この文字による知識、技術が民俗文化に大きく影響を与える状況は、中国文化を考察する上で無視することはできない。闘コオロギ文化に限つても、文字文化、出版文化の発達した中国において、好事家による手引書、指南書が発行され、これが一般の闘コオロギ愛好家の民俗知識、技術に大きな影響を与えている。

さらに、これに人々の口頭によつて伝えられた知識、技術が加わることによつて、その全体量は大きく膨らむ。たとえば、先に述べたような細かい「品種」の特徴を口頭で端的に解説するために、また、その解説を覚えやすくするために、内容をコンパクトにまとめ節回しをよくした「歌謡」が伝えられている。だいたい主要な品種には「歌謡」がついており、たとえば青色類の「重青」という「品種」は「重青顔色似真青、六足無斑此判明、若配白牙棟梁材、紅牙雖好非將軍」「重青」は色が「真青」に似ているが、六足に斑がないので見分けることができる。もし、白い牙をもつていれば棟梁の才があり、赤い牙をもつていれば悪くはないが、將軍(強いコオロギの尊称)ではない」という韻をふんだ調子のよい歌で、その特徴が解説されるのである。

また同様の知識として、「口訣」がある。これは「歌謡」と同じように、コオロギについての習性や特徴を端的に言い表す決まり文句である。たとえば、「三反」という言葉がある。これは、コオロギが一般の動物の道理に反した三つの特徴をもつ、ということを的確に伝えるものである。第一に、普通の動物では闘いに負けたほうが鳴くが、コオロギは闘いに勝ったほうが鳴く点。第二に、普通の動物は交接するときにオスが上になるが、コオロギはメスが上になる点。第三に、普通の動物は交接をすればオスの力が衰えるが、コオロギは交接をすればほど力は増し、闘争心がわいてくる点である。このような知識は、形式化された語りにより暗記され易くなっている。「三反」以外にも、「八忌(避けるべきコオロギの八つの特徴)」や「十不闘(闘わないコオロギの一〇の特徴)」、「五不選(選んではならないコオロギの五つの特徴)」などと枚挙にいとまがない。このような知識は、闘コオロギ愛好家の口から口へと伝えられてきたが、これもまた経験で得られた知識と同様に文字化されることによつて、広く流通している。辺氏の書いた闘コオロギ指南書に限らず、多くの類書に同様の「歌謡」、「口訣」が収録されているのである。

7、コオロギを仕立てる人々

以上のように、優れた「自然」の観察者たちによつて、コオロギは民俗的知識のもとに細かく分類され、ある体系のうちに位置づけられる。ただし、それだけでは、コオロギはまだ、戦士としてのコオロギではない。闘コオロギにおいて、コオロギ自身の先天的な資質はもちろんのことであるが、その資質を引き出すための飼い主側の十分な庇護が求められるのは当然のことである。辺氏は、コオロギの優劣は、「三分在種、七分在養(三割がコオロギの「品種」

で決まり、七割がその養育の仕方が決まる」と、育てあげることの重要性を語る。まさに闘コオロギ愛好家たちのものにもたらされたコオロギたちは、これからが強いコオロギになるための正念場なのである。

力量を見込まれたコオロギたちは、各闘コオロギ愛好家の手で繊細、丁寧に育てられる。しかし、その養育方法は、コオロギを健康に生かしていくという生存レベルの管理の段階にとどまらない。それ以上に、門外漢には想像できないような過剰さでコオロギに対してアクセスしていくのである。次に、闘コオロギ愛好家たちが駆使する、コオロギを仕立てるための知識、技術をみていこう。

コオロギは、日常たいてい「蟋蟀盆（上海では財吉盆ともいう）」とか「蟋蟀籠」という円筒の陶器で飼育される。一匹あたりに一個の「蟋蟀盆」があてがわれる。上海の狭い住居では置き場に困るので、ベッドの下に何十もの「蟋蟀盆」を積み重ねて飼うことになる。「蟋蟀盆」は、古いものほどよいとされる。それは、新しい「蟋蟀盆」は焼成したばかりで陶器から有害な成分が滲み出すと考えられているからである。それほどコオロギは敏感だと考えられている。そのため新しい「蟋蟀盆」を購入したときは、数年地中に埋めたり雨曝しにしたり、また、水中に浸したり煮沸したりした後ではじめて使用するという。

「蟋蟀盆」はコオロギにとっての「住居」なのであり、コオロギの健康を維持するためいつもきれいに保たねばならない。二、三日に一度は餌の食べ残しや糞のこびりついた「蟋蟀盆」の底を、金たわしのようなものでこすり落とす。さらに、布で拭きあげるといふ念の入れようである。「蟋蟀盆」のなかには、「鈴房」を据え置く。たいてい陶製であるが、なかには紅木（マホガニー）でできたものもある。「蟋蟀盆」がコオロギの「住居」だとすると、「鈴房」はコオロギの「寝室」である。「鈴房」の脇には飲み水を入れる「水碗」と、餌を載せる「飯板」という二センチメートル

足らずの小さな「食器」を配置する。「飯板」は一分硬貨で代用されることも多い。「蟋蟀盆」のなかは、コオロギの世界であるとともに、人間世界のミニチュアでもある。

これら「食器」は不潔にならないよう、こまめに取り替えるようにする。取り替えるときにコオロギに手で触れぬよう竹のピンセットを用いる。コオロギは手で触れると弱りやすく、ちょっとしたことで足がもげることがあるため、取り扱いには注意を要する。そのため、水の補給にはスポイトを、餌の補給に専用の匙を用いている。

餌は、闘コオロギ愛好家それぞれの経験と、創意が反映しているので、一般化して語れないが、粥状にした米一、二粒というのがもつとも簡単なものである。花鳥魚虫市場で売られているときは、たいていその程度のもしか与えられていない。しかし、熱心な闘コオロギ愛好家は、購入後家へもつて帰ると、餌に様々な工夫を凝らしている。たとえば、魚、エビの頭やカニの肉、豚肉の赤身、カエルの足などを与える人もいる。また、魚骨やトウモロコシ、蛇の肉、ブタの肝臓などを細かく潰して配合し、与える人もいる。たいてい闘いの前後には、力のつくこととされるもの（動物性のもの）が与えられる。季節ごとに餌の種類、配合比率を変えたり、丁寧な人では病中病後というアクシデントルな事態に対応して餌を調節する人もある。必ず火を通すとする人、逆に天然物の生でしか与えない人など調理法も様々である。何をどれくらい、どういった割合にし、どのように調理して与えるかということは、闘コオロギ愛好家個々のこだわりによって決められるのであり、そのレシピの肝心な部分に関して基本的な秘密とする人も多い。

このような餌とともに、日常的に与えられる飲み水も単なる水ではない。人間に飲ませると同じく、水道水そのまま与えることはなく、必ず一度沸騰させたものの湯冷ましを与える。こまめに交換することが肝心である。なかには、コオロギのためにミネラルウォーターを購入している人もいる。また、甘草や茯苓、高価な朝鮮人参など漢方薬

を煮出した湯を薄めて与える人もいる。その配合比率、濃度なども個々の闘コオロギ愛好家で工夫されている。花鳥魚虫市場では、コオロギやその飼育道具に混じって、そういうコオロギの健康用品も売られている。餌や飲み水はコオロギの日常の健康や、闘いのときの体調に大きく影響を与えると考えられているため、季節やその時々々の状況を鑑みて注意深く細やかな対応がとられている。

コオロギの「食」、「住」に関して、このように注意深く細かい技術で手間暇がかけられている。しかし、日常的な厚遇は、それだけにとどまらない。

大きな哺乳動物のペットならそう珍しいことでもないのであるが、コオロギのような小昆虫に対してはほとんど行われないであろう飼育技術がある。それは「入浴」である。これは基本的に、体の汚れを落とすために行われるが、まだ暑い時期には暑さを避ける役目も果たすという。晩夏から初秋にかけては三〇五日に一回、気温の低い頃は一週間前後に一回「入浴」させればよい。

やり方は、大きな洗面器や鍋に水を入れ（これも雨水か、きれいな河の水がよいという）、甘草を加えてよく混ぜ、ほんのりと黄色くなったら水をかき回して、そこにコオロギを落とすというものである。水の流れにしばらく任せておくと、油や汚れが浮きあがってくるから、それを取り除き、コオロギを捕る専用の網でコオロギを掬いあげる。網に入れたまま水につけることもある。「入浴」後は、トイレットペーパーの上に乗せて十分に水を吸い取る。この「入浴」が闘コオロギ愛好家の間で、どの程度実践されているのかわからないが、辺氏など熱心な闘コオロギ愛好家は必ずやると語る。

「食」、「住」や「入浴」など、コオロギの日常生活における愛好家たちの介添えは、一貫してコオロギの健康、闘いに向けてのよい体調を維持するためのものである。コオロギの体調は、毎日の世話のなかで十分に把握しているから、もし、体調がすぐれなさそうだと、「治療」を行う。「治療」するには、まずどのような症状か判断する必要がある。夜間鳴き止まないとか、動きが鈍くなったとか細かい行動に着目して、病因を診断し、具体的な治療法をあてはめていく。治療法は、漢方薬を与えるのが中心で、症状に合わせて薬を選ぶ。戦闘後の傷の治療も同様で、負傷した部位によって治療法や漢方薬が異なる。このような対応は、人間に対する対応と何ら変わりはない。もちろん、使用する薬や量など処方には違いはあるものの、基本的に中医（中国医学）と同じ論理体系で対応していると考えて差し支えなからう。

さて、最後にコオロギの体調を整え、気力を充実させる飼育技術をひとつ紹介しよう。それは、メスコオロギとの交接である。先に「三反」ということで、コオロギが動物の道理に反した三つの特徴をもち、そのひとつに普通の動物は交接をすればオスの力が衰えるが、コオロギは交接をすればするほど力は増し、闘争心がわいてくる点を紹介したが、この性質を信じて、闘コオロギ愛好家は計画的にコオロギに交接させる。おおよそ白露を過ぎると、オスの「蟋蟀盆」のなかにメスを放し、一緒に住まわせる。すると自然に交接を開始する。メスと一緒に住まわせると、もともとと住んでいた山野とは違う環境下の「蟋蟀盆」中でも落ちついて生活できるという。

メスは、産卵管を含んで三つの尾があるようにみえるため「三尾子」、あるいは「三妹子」と呼ばれるが、オス同様に体の大きさ、形、模様、色などで「梅花三尾」、「老虎三尾」など数種類に分類され、オスの相手としての適不適が判断される。この際の判断において温順さ、交接への積極性などが問われている。コオロギは精力旺盛なので、一匹のオスに対し三〇五匹のメスを配するのが理想とされる。そのため、飼育数はオスの三〇五倍ということになるの

あろうが、実際はそんなに多く飼う人はいない。また、オスと違って飼育にはそれほど神経質にはならず、大きな器に土を入れてまとめて飼う場合が多い。この技術を、人工繁殖に応用する人もおり、そこから生まれたオスも闘コオロギに使われるが、育ちや餌が違うということで、やはり天然物には敵わないと考えられている。そのため、全面的に人工繁殖だけでコオロギを確保している人はほとんどいない。辺氏は、人工繁殖の先駆的存在であるが、彼ですら毎年、野生のコオロギを求めて産地へと赴いているのである。

この人為的な交接技術は、給餌と同じように、闘コオロギ愛好家それぞれの経験と、創意によって工夫されているので一般化できないが、丁寧な人になると一日に三回、朝、昼、晩と決まった時間にメスを入れ、交接後すぐにメスを取りあげ隔離し、過剰な交接を防ぐという人もいる。またある人は、闘わせる二三日前からメスを「蟋蟀盆」のなかにオスと同居させ、対戦の半日前に一度取り出し、一時間前に再び一緒にして交尾させるという工夫をする人もいう。

このように人為的交接技術は、オスの戦意高揚、体力増進をはかることに主眼が置かれているところに特徴がある。通常、家畜などはその生殖が人の管理下にあるが、その際の性行動の管理は、再生産や群れ管理技術に寄与する技術である。ところが、この闘コオロギにおける性行動の管理は、闘うというこの虫の存在理由となつていて性質の遂行のために寄与するのである。人工繁殖に利用されることもあるため、再生産に寄与する側面もないことはないが、メスの選択は明らかに交接という性行動自体の能力に基づいているのである。認識的に、生殖の以外の目的で性行動がコントロールされる。これは、多くの動物飼育技術のなかでも特異的な認識を与えられた技術だといえよう。

8、コオロギを彩る人々

このような愛好家たちとコオロギとの、念入りに行われる微に入つた日常的つきあいは、単に両者の関係性のみで成立するものではない。その背後で、そのつきあいを支える人々が活躍してはじめて、このつきあいは可能となつていたのである。そして、その支える人々の存在が、闘コオロギ文化を、よりふくよかな文化として高め、彩っている。その支える人々とは、コオロギにまつわる道具類を作り、売る人々である。

先にも述べたように、コオロギ飼育には様々な器物が用いられ、それが不可欠なものとして使用されている。それらの器物は、コオロギと同じく花鳥魚虫市場で売られている。

こういう器物を売る人に、孫根林氏がいる。彼は、一九二九年江蘇省の無錫で生まれた。コオロギ商・愛好家の間では有名な器物商で、「老無錫」のあだ名で呼ばれている。孫氏は、もともとは小鳥に関する器物とともに、コオロギの器物を取り扱っていたが、コオロギのほうが儲けがよいので六〇歳のときに、コオロギの器物専門になった。文廟花鳥魚虫市場に、常設の店を出していたが、再開発のため一九九七年一二月に長海路の五角場花鳥魚虫市場へと移転した。孫氏は、「蟋蟀盆」、「鈴房」、「水碗」、「飯板」、「草」、「簧(体重計量秤、北方では「準」、「毫戥秤」ともいう)」など、様々な闘コオロギの道具を売っているが、それらはすべて名のある年代物である。孫氏は、闘コオロギの道具は、古ければ古いほどよいという。それは、コオロギたちの体によいし、さらにコオロギ愛好家の眼をも楽しませてくれるからである。いわゆる工芸品であり、孫氏は、コオロギ器物の骨董商なのである。

闘コオロギ愛好家たちにとっては、このような古い器物は、よいコオロギと同じく垂涎の的となっている。よいコオロギには、それにあつた風格のある道具をあてがわなければならない。愛好家たちは、毎年コオロギを手に入れると、すぐにその力量を把握し、序列化するのであるが、それを飼育するときには、もつともよいコオロギに、自分もつている器物のなかでもつともよいものを使わせるのが普通である。とくに、「蟋蟀盆」はそのような器物の代表である。

「蟋蟀盆」には、宋代作「王府盆」、「平章盆」、「象窯盆」、元代作「至徳盆」、明代「永楽盆」、「宣徳盆」など、名器とされる著名な「老盆（古い「蟋蟀盆」）」がある。それらには、龍や雲、鳥獸、花、山水が描かれ、これ自体芸術品である。新しいものにも、「毛主席生誕百年記念盆」などといった世相を映し出した「蟋蟀盆」があり、それはそれで人気がある。また、四個の「盆」それぞれの蓋に、「恭」、「喜」、「発」、「財」と文字を打って、合わせて「恭喜発財（金儲けができますように、という祝いの言葉）」となる、縁起のよいセットものもある。

さすがに宋代、元代、明代の「蟋蟀盆」は、それほど市中には出回らないが、清代のものならば、たいいていの「老盆」商ならばもっている。民国時代のものだと、普通に市場にも並べられている。孫氏は、二〇〇個ほどの「老盆」を有し、そのなかには明代の「宣徳盆」もあるというが、それは普段は店の奥にしまったままで、よほど気に入った人にしかみせない。「鈴房」、「水碗」、「飯板」なども同様に古いものが好まれ、骨重的な価値が付与されている。とくに、「水碗」は、二センチメートル足らずの小さな器にもかかわらず、色とりどりの花や動物、人像など、多様なモチーフが描かれており、多くの種類が出回っている。

その美しさと骨重的価値から、古い名器は破格の値段がつく。たとえば、「蟋蟀盆」などは、現在、かつての名器のイミテーション——銘まで同じである——が多くてまわっているが、これがせいぜい一〇元前後で購入できるの対し、民国時代のものならば七〇〇〜一、〇〇〇元はする。明代の名器ともなると、本物ならば数万円にも達するものもあるという。コオロギ同様、これらの器物にも偽物が横行しているため、器物商にとって真贋を見極める眼が重要であるという。しかし、本当の名器は市中にそれほど出回ることなく、売り手の風体と、売っている状況を十分に把握すれば、だまされることはない。「老盆」商たちは、名器についてはその形状の特徴のみならず、現在の所有者、その手にわたる来歴まで把握しているものであるという。

小さな「水碗」、「飯板」などは、現在では、一元も出せば、安物なら五個ほど買えるが、明清代のものだと一、〇〇〇元は下らない。「筥」は、古さと材質が決めてで、現在のものはプラスチック製で、一五〇元程度であるのに対し、二〇〜三〇年前のものでも紅木製のものは一、五〇〇元、秤の棹に象牙を使ったものと三、〇〇〇元もする。

このような名器は、普通の闘コオロギ愛好家には、とても手が出ない代物である。よほどの金持ちか、本当に闘コオロギにのめり込んだ愛好家ぐらいが買い求めるものであるといえる。また、闘コオロギをやらぬ人々の手にわたることもまれではない。その美術工芸品としての評価は、闘コオロギ愛好家たちの世界を超越して、闘コオロギには無縁の一般の美術品愛好家、業者たちにも伝わり、骨董市などの店先でも売り買いされている。彼らは、コオロギ自体には興味はなくとも、コオロギの道具には大いに食指を延ばす。コオロギに関する道具のコレクターもいるほどである。孫氏も、闘コオロギ愛好家とともに、それらのコレクターとの交流を通じて売買しているという。闘コオロギ文化の外延は、美術工芸文化と密接につながっているのである。

このような名器に手が出ない大多数の闘コオロギ愛好家たちは、同じく花鳥魚虫市場に店を開いている、普通の器

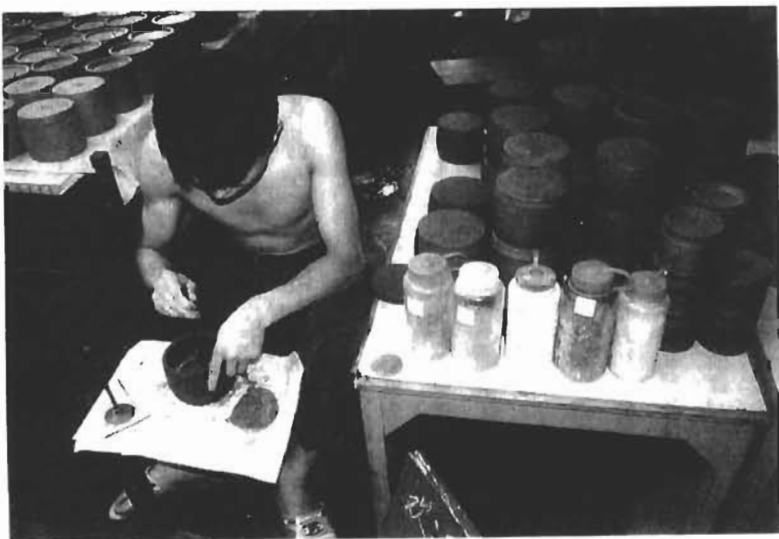


写真 9 : 「塘底 (搗底)」の職人

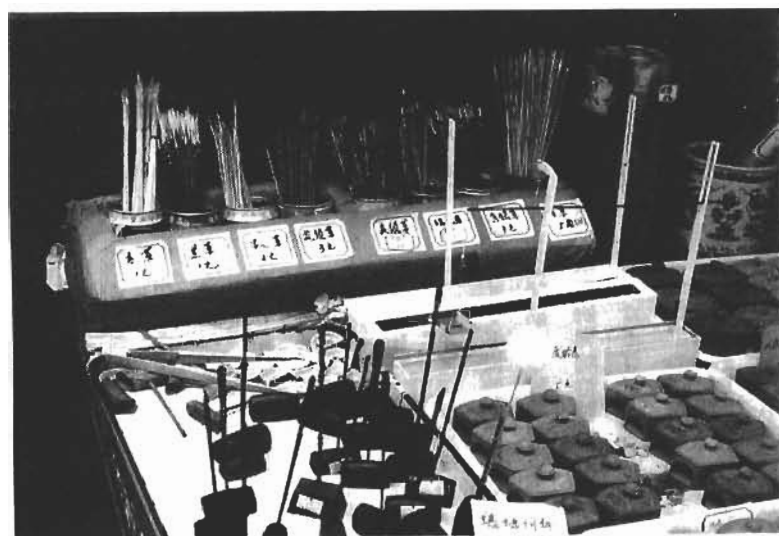


写真 10 : コオロギ道具を売る店先

關コオロギからみた中国漢人都市民の自然観

物商から道具類を購入する。花鳥魚虫市場には、關コオロギに關する道具は、ありとあらゆるものが揃っており、ここで、關コオロギ愛好家たちは、コオロギを仕立てるための道具類を手に入れていくのである。多いのは、やはり「蟋蟀盆」に關する商売人で、新しい廉価な「蟋蟀盆」を売っている。

この「蟋蟀盆」商の側には、その「盆」を仕立てあげる職人がいる。先にも述べたように、「蟋蟀盆」は古ければ古いものほどよく、新品の「蟋蟀盆」は焼成したばかりで陶器から有害な成分が滲み出し、コオロギの体によくないと考えられている。そのため、新しい「蟋蟀盆」を購入したときは、地中に埋めたり雨曝しにしたり、煮沸したりするが、さらに、その健康に留意するときは、それ専門の職人に頼むのである。

この職人は、依頼人から新しい「蟋蟀盆」を受け取ると、まず、漢方薬の溶液にこれを浸す。十分に浸し終わると、「盆」の底に赤土を入れ、平たい円形の真鍮板のついた道具で、きつく締め固める。いわゆるコオロギの家の床作りである。コオロギは、土の上の生活を好むので、「盆」そのままよりも土を敷いた



写真 8 : 「老盆」商に並べられた「蟋蟀盆」

ほうがよいという。この作業を「塘底」あるいは「搗底」と呼び、熱心な人になると毎年自分の「蟋蟀盆」の床を取り替えるという。この、「塘底」は、単なる土底加工で終わらず、さらに、この土底を乾燥させて、これにコオロギの健康を守るため漢方薬などを塗っていく。甘草やウコン、紫砂など数種、色とりどりの薬剤を底に塗布するのである。これを乾かして、ようやくコオロギに優しい「盆」ができあがる。

こういう「蟋蟀盆」に関わる商人に混じって、その他のコオロギの器物商がいる。彼らは、コオロギ道具の雑貨屋と比べてよく、その品数は数十点にも及ぶ。「鈴房」、「水碗」、「飯板」、「虫網」、「簞」、「闘盆」、「闘柵（新式の試合場、「闘格」ともいう）」、「草」、「毛球（コオロギを追いこむ道具、北方では「絨球」ともいう）」、「提勺（コオロギを移す道具、北方では「過籠」ともいう）」はもちろんのこと、「草筒（「草」を入れるケース）」、器物を扱う竹製のピンセットや、水を与えるスポイト、餌を与える匙が幾種類も並べ立てられている。「草」だけでも毛先、柄などの材質によって何十種類にも分かれる。植物の繊維をほぐして毛状にしたものや、太さ〇・数ミリのネズミの髭を用いたもの、柄に紅木を使ったものなど、その細密さはかなりのものである。「草」に限らず、闘コオロギに使用される道具は精密であり、さらにデザインや形式が多岐にわたっているため、売られるものは必然多くなるのである。

変わったところでは、コオロギの健康薬としての甘草、栄養剤としての「中国水産研究院特製コオロギ飼料」などマニアの心をくすぐるものもあり、また最近では、闘コオロギを収録したVCDや、コオロギの名虫を印刷した闘コオロギランプまで出回っている。さらに、見落としてはならないものとして、コオロギの指南書、手引書がある。

闘コオロギに関する知識、技術は、経験や口承以外に文字を媒介にして得られるものであり、経験によって得られた知識、技術のある部分は文字化されることにより流通していくことは、すでに述べた。これが、一般の闘コオロギ

愛好家の民俗知識、技術に大きな影響を与えているのであるが、この知識、技術の流通のメディアである手引書、指南書が、このような店で販売されているのである。もちろん、これらの本は、普通の書店の園芸コーナーにも並んでいないこともないが、たいい品数は少なく、あっても新しいものばかりである。しかし、コオロギ雑貨屋にすれば、古い本から新しい本まで、年代、地方を限らず様々なものを手に入れることができる。このようなコオロギ雑貨屋は、単に闘コオロギに必要な器物を売るだけではなく、闘コオロギに必要な情報も売っているのである。

以上のように、花鳥魚虫市場において、多岐にわたる「もの」と「技」、そして「情報」が、コオロギの周りを取り巻いている。それらは、コオロギが、ただ生身の虫として生きていく上には、まったく必要のないものばかりである。しかし、都市にもたらされたコオロギたちは、もうただの虫ではない。人間によって形作られる虫なのである。花鳥魚虫文化のなかの「虫」として存在するためには、これらの「もの」、「技」、「情報」が不可欠なのであり、それを下支えする人々が存在して、はじめてふくよかな闘コオロギ文化が成立するのである。

9、コオロギを闘わせる人々

コオロギは、数百年もの長きにわたって闘ってきた。そして、あるときは、賭けの対象として、またあるときは子供の遊戯として、賞玩されてきた。現在では当然賭博は禁止されているため、大ぴらに行われることはない。ただ毎年秋になると紙面を賑わせる、コオロギ賭場の摘発の記事から、エキサイティングなコオロギの取っ組み合いに、人生を賭する人々の存在が確認できる。また、そういう人々には、コオロギのシーズンに産地にいけば必ず会うことが

できる。しかし、最近では闘コオロギ愛好家たちによって組織された同好会や研究会などの、合法的な組織による健全な大会も開催されており、それは全国大会が開かれるほどまでになっている。このような公式戦の背後では、友人などを相手にした、こじんまりとした対戦が無数に行われている。

コオロギは、買ってすぐに闘いに使えるというものではない。その実力を発揮するためには、すでに述べてきたような日常生活の節制が肝要である。そして、徐々に普通のコオロギから闘うコオロギへと仕立てあげられていくのである。秋分前にはまだ体ができていないので、十分に餌をやり静かに育てる。その頃にあわてて闘わせると、怪我をするものになる。秋分過ぎて体が十分にできあがってから、闘いはじめる。それでも、すぐに本格的な試合には入らない。たいてい各地の同好会では、この頃に簡単な試闘を行う。これで強さを見極め、さらに体調を整える。「品種」によつて、早い季節に強い早熟のコオロギや、逆に晩生のコオロギがあるので、闘いはじめさせる時期を飼い主は的確に見極めなければならない。闘いの直前には、その戦意を高揚し、気力を十分にするため様々な工夫がなされる。メスとの人為的な交接もそのひとつといえる。

闘い前には、餌など与えるものにとくに気をつける。普段の食事さえも秘伝として隠す人がいるくらいであるから、闘い前の食事は秘伝中の秘伝ということになるのか。色々な虫のさなぎを漬けて与える人もあれば、普通、鳥の餌として用いられる「面包虫」と俗称される幼虫を食べさせる人もある。実のところ闘コオロギ愛好家同士も、本当に何を与えているのかは、お互いよく知らない。興奮させるために漢方薬を与えるのはまだ許せるとしても、プロの闘コオロギ賭博師のなかにはヘロインなど麻薬の類をなめさせ、乱酔した状態で闘わせる者までがあるという。こんな噂がまことしやかに語られるくらい、闘いの前にはみんなが色々なことをやっているのである。極端に麻薬とまでは

かなくとも、試合の直前にメンソールの効いた清涼油を、コオロギの額に塗っておき、相手が組むのを厭がり逃げるように仕向けるという、姑息な手段をとる者もいる。こういう薬を用いたドーピングのコオロギを「薬水虫」と呼び、このような虫が試合へ参加するのを防ぐため、半日前には「蟋蟀盆」に入れ、試合まで封印するというルールをとることもある。

試合前には、もち主たちも相当神経質になる。相手が、「薬水虫」でないか、何か不正はないか、自分のコオロギの相手が釣り合っているかなど、もち主は大いに気になるところである。「上海蟋蟀研究会」では、対戦の前には、必ず計量する。取り組みは、ボクシングのように、同じ大きさのものを同士の基本的な当てる体重別となっている。そのため計量するのであるが、この計量が、すでに述べたコオロギの分類や飼育技術に、負けじ劣らず素人には推し量ることのできない繊細、微妙な世界を形成している。

上海では、コオロギの体重を量るのに、「筥」という天秤を使う。コオロギは一グラムにも満たない小型の虫である。その体重を量るといっても容易ではなく、非常に精密な作りが要求される。普段の生活で一グラム以下のものを量ることなどあるはずもないし、そんな必要にも迫られないのであるから、コオロギ専用の計量器を作らねばならない。昔は紅木で作られる一種の工芸品であったが、現在はプラスチック製のものが登場している。とはいえ、今でも純粹にコオロギだけを量る道具として作られ続けている。

コオロギは跳ね回るので、容易に天秤に載ってくれない。そのため、「過籠（北方では「吊籠」ともいう）」という容器に閉じこめて計量する。「筥」はあらかじめ「過籠」の重さを見越して設計されている。上海では、「尊（あるいは「斟」ともいう）」、その一〇分の一の「点」という単位をもって、コオロギの体重を表現する。この単位も計量道

具と同じく、コオロギを量るためだけに使われる専用の単位である。なんと闘コオロギは、日常生活とは無縁の、ミクロの世界しか通用しない独自の単位までも保有しているのである。

この単位がこれまた非常に細かい。「上海蟋蟀研究会」では、二尊から五尊まで（約〇・五一グラム〜〇・七四グラム）の体重別とする。それより小さいもの、大きいものは参加資格がない。二尊のひとつ上のランクは二尊一点であるが、これは「二正一」と表現される。その上の二尊二点は「二正二」である。このように分けると、二尊から五尊まで三一階級にも分けられることになる。同じ体重のコオロギを基本的に取り組ませるようにするが、その差二点まで対戦は認められている。たとえば、「三正三」のコオロギは「三正一」〜「三正五」の五階級との対戦が可能である。

○・数グラムの体重しかないコオロギの個体差は、当然一グラムもないから、一グラムに満たない重さを三一に分けて、意味ある階級として利用しているのである。この微細なところまで表現しようとする、闘コオロギ愛好家たちの執着は想像に絶するものがある。

細かい体重でも、小さなコオロギにとっては大いに意味がある。彼らが一点でも小さいコオロギと闘わせようとして（当然大きいコオロギが強いと考えられている）努力を続ける姿からも、この小数点以下の闘いは意味あるものとして意識されていることは間違いない。それは、闘コオロギ愛好家はその細かい体重差を重要視するあまりに、闘い前にコオロギに減量までもさせることから理解できる。この方法も多様で、「蟋蟀盆」にコオロギを入れたままドライヤードで暖めて体内の水分を減らすやり方、腹を下すマコモを食べさせるやり方、もっと極端なものには「蟋蟀盆」のなかに乾燥剤を直接に入れるやり方などもあるという。計量の単位が細かいから、乾燥剤を入れて体の余計な水分をとると、簡単に数点下がってしまうのである。

このような複雑な前段階を経ていよいよ闘いである。「上海蟋蟀研究会」の大会では、今では弁当箱の形をしたプラスチック製の「闘柵」という専用の枠を用いるが、日常のちょっとした闘いには「蟋蟀盆」がそのまま使われることも多い。また、古くは「蟋蟀盆」より少し大きめの闘い専用の盆「闘盆」も使っていたが、現在はほとんど見受けられなくなった。

勝負は、どちらかが戦意を喪失して逃げ回り、その相手が勝ちどきをあげた時点で決着する。研究会の大会では正式に審判がついて判定制をとっている。そこでは、五戦して三勝したコオロギを勝者とするやり方と、三戦で二勝したコオロギを勝者とするやり方があるが、最近では三戦マッチが多い。闘う前の二匹のコオロギは、「草」で触覚や足を刺激され、興奮を高められる。しかし、すぐにぶつかり合い、咬合するものもあれば、互いに牽制して対峙したままのものもある。動きの鈍いときはさらに「草」でくすぐり、積極的に闘うように誘導する。このくすぐり方にも様々なやり方があり、状況に応じて飼い主が駆使しなければならぬ。このくすぐり方の練習法を書いた指南書もあるぐらいで、こうなると飼い主もコオロギと一緒に闘っているといっても過言ではないのである。



写真 11: 「闘柵」を用いた闘コオロギ

10、結語——「文化」のなかに埋め込まれた「自然」

關コオロギ賭博師王氏は、「コオロギを『寶石』に喩える。

人間は美しい『寶石』を求めようと思うと、美しい『寶石』のある山にいつて、『原石』を掘り出さねばならない。しかし、掘っただけではただの石の山である。次に、美しい『寶石』となる『原石』を、玉石混淆の石の山から探し出さねばならない。しかし、美しい『寶石』になるであろう『原石』をみつけたとしても、そのままではただの石である。次に、磨かなければならない。しかし、ただ磨くだけでは美しくはならない。美しくするには、念入りに手をかけて、巧ききれいな形に、磨きあげなければならぬ。そして、美しく仕上がった『寶石』は、美しい箱に入れて、美しい人がもたなければならぬ。美しい『寶石』は、美しい人にこそ、もつ資格がある。

優れた「自然」の観察者による、この深遠な比喩は、まさに關コオロギの本質を見抜いている。

山野に生きていた生身のコオロギは、人間に見いだされて、生まれた故郷を離れ都市へとやつてくる。そこでは、もはや人間によって管理されることよつてのみ、生き続けることができる。しかし、コオロギを取り巻く管理の知識や技術は、コオロギが単に生き続けるという段階にとどまらず、多様な局面に応用されている。つまり、コオロギは、人間によつて、生存レベルにとどまらないアプローチを受け続けるのである。そのコオロギは、本来の「自然」から離脱した瞬間から、少しずつ人間に価値を付与、投影されながら、別の「自然」の枠組みへと体系づけられる。その意味で、都市に存在する關コオロギは、生身の生き物ではなく、少しずつ仕立てあげられた生き物なのである。

我々は、そういった、コオロギが人間から受ける過剰なアクセスのなかに、中国漢人都市民の奥深い、尋常ならざる自然観を見いださなければならぬ。

この文化は、まず第一に微に入り細をうがつような極微さにその特徴がある。百数十種類にもよる「品種」や「相法」は、わずか数センチメートルのコオロギの各部位を隅々まで舐めまわすように凝視し、その様相を規範と照合することによつて得られる。それは、顕微鏡的な細密世界の代表であろう。また、わずか〇・数グラムの体重を三二にも区切り、闘う相手があてがわれる階級制も、極小の細やかさを体現している。さらに、ミニチュアの要素をもつ道具類や給餌、入浴、交接などの日常のホスピタリティーなどにも、この文化の微を究めようとする志向性が読みとれる。

この志向性は、植物を小空間のなかに封じ込める、盆栽の文化に一脈通じるものがある。フランスの東洋学者ロルフ・スタンは、盆栽を評するに「やむをえず小さいのではない。それどころか逆に、小さいことで、そのものに一層の価値が与えられるのである。…実際、自然の再現は、それが現実の尺度から遠ざかれば遠ざかるほど、神話化され伝説化される。…人の手でとりあつかわれ細工されるようになると、最後に残った作爲的な、見せかけの現実すらとり除かれる。つまり唯一本物の実在である」[スタン 一九八五・七八―七九]と述べている。この考え方は、關コオロギ文化にもあてはまるのであり、この言にしたがうなら、コオロギの分類や階級、道具はやむをえず細小なのではない。それは細小、緻密であることに価値があり、間違いなくそれは世界の拡大につながっている。現実の尺度から離れた極小の世界はまさに神話化されているが、そこに登場する動物は実在の動物である。そこに実在としての「自然」がある。

この文化は、第二に複雑な体系化を志向する点において特徴的である。感覚的ではあるが、紛れもなく確固とした基準に基づく分類行為により、すべてのコオロギは、何らかの形で「品種」や「相法」という体系のなかに位置づけられる。また、少しの差しか存在しない体重をあえて指標とし、独自の単位を使うことによって、階級という体系のなかのどこかに必ず位置づけられる。それは機能ごとに専門化された道具からも同様のことがいえ、コオロギという小昆虫一種に数十種類の道具が付随し、それぞれ飼養の各段階で活用される局面が決まっており、飼育の体系のうちに的確に位置づけられているのである。

一見矮小にみえる闘コオロギの世界は、それ自体「自然」であり、「蟋蟀盆」のなかをのぞき込む人々は、そこに山野にア・プリアリにある「自然」とは異なつた、ミクロ・コスモスとして体系化された「自然」を感じとっているのである。そこでコオロギは、あるがままの生き物としてではなく、人の手によって作りあげ、完成されるべき生き物として扱われている。そのような積極的人為は、望ましいものとして理解され、管理は徹底されているのである。人間による「自然」への干渉、介入が本来的に否定されるものではなく、支配し、管理することがむしろ望ましいとすらいえるであろう。そして、そこに創出された「自然」は、盆栽と同じく「あるべき自然」がデザインされたものであつて、「あるがままの自然」とか、「文化」に對置されるような「自然」とは大きく異なるのである。

最後に、この文化は、工芸文化との連続性がある点において特徴的である。専門分化した道具類は、機能ばかりでなく、美やその歴史性が重要視されている。「蟋蟀盆」、「鈴房」、「水碗」、「飯板」などは陶器、磁器であり、骨董価値も高く、古いものは高値で取引されている。「蜜」や「草」を入れるケースには紅木を使用し、飾り部分に象牙を使い、美麗な彫刻を施すなど、道具は単なる闘コオロギの器具の域を越えて美術品となっている。コオロギは飼わなくとも、

コオロギの道具を収集する愛好家がいるほどで、闘コオロギはコオロギだけではなく、その背後で支える道具をめぐる工芸文化も等しく楽しまれているのである。そこで人工の道具と、天然の生き物であるコオロギに大差はない。

このようにみると、闘コオロギの文化は、山水画に代表される絵画や工芸など、人工的な虚構の芸術に実在としての「自然」を取り込む「芸術の自然化」と連続している。中国の空間思想を時空を越えて解き明かした中野美代子は、山水画に描かれる風景を、「ありうべき風景」ではあるが力学的には「ありえぬ風景」〔中野 一九九一・九六〕と表した。まさに卓見であるが、この言葉を借りるなら、中国のコオロギは「ありうべき動物」ではあるが、生物学的には「ありえぬ動物」とでもなろうか。その自然性は、「文化」のなかでプランニングされているのである。これには「自然の工芸化」と、とらえてよいであろう。これは、実在としての「自然」に、人工的な芸術体系をもち込むことによって非現実を産み出す行為である。しかし、その非現実の「自然」のほうが、「ありうべき自然」として、むしろ「自然」だと受けとめられ、心地よさや安らぎを人々に与えているのである。

このような「自然」へのアクセスは、ヨーロッパ的な自然観から見れば、「自然」の支配という人間中心主義のあらわれとネガティブに眼に映ろう。しかし、中国文化において「自然」は、人間の可知的宇宙に位置づけられるのであつて、「文化」と大きな隔たりをもつような「自然」の枠組みはまったく必然性がない。その意味において、中国では「文化」のなかに自然が埋め込まれている (embedded) 〔松井 一九九七・九〕のである。我々は、中国漢人のもつ「自然」の概念を、「それぞれの民族集団によって独自の文化装置として用いられ、個別に文化的に画定され、独自に彩色されている」〔松井 一九九七・八〕ものとして扱わなければならないのである。

付記

本稿は、一九九五年度文部省在外研究「中国・江南地域における家畜動物の文化史的研究——中国民俗学における環境理解の理論的研究とその応用について——」、および一九九六～九八年度文部省国際学術研究「環東シナ海(東海)農耕文化の民俗学的研究」(第二期)代表神奈川大学福田アジオ教授)の調査による成果である。

本稿を執筆するにあたり、神奈川大学福田アジオ教授には、調査の機会をお与えいただき、上海海関高等専科学校尹榮方副教授には、上海の關コオロギについて様々なご助言をいただいた。また、北海道文学部中国文化論講座武田雅哉助教授、大田加代子助教授には、關コオロギに関する文献についてご教示、ご提供いただいた。さらに、華東師範大学蔣宏偉氏には、山東省調査時の調査を補助いただき、そして、北海道大学院農学研究科大学院生伊藤元氏には、精密なサンプル同定と分析の労と、昆虫学に門外漢の小生へのご指導を多々いただいた。末筆ながら、ここに記して感謝の意を表する次第である。

【注】

(1) 従来の關コオロギの研究において、実際のフィールド・ワークの資料を基礎にした実態的研究として Berthold Lauter、周達生らによる研究がある。Lauter は、中国博物学、中国民族学の先駆者であり、フィールド・ワークによって一九〇〇年代初頭の關コオロギの状況を克明に記録している(なお、Lauter の功績については、「武田 一九九二」に詳し) [Lauter 1927]。周は、民族動物学的アプローチによって、実際のフィールド・ワークの見聞を基礎に、書誌的な情報も織り交ぜ、中国社会の動物をめぐる文化の描出に成功しているが、そのなかで關コオロギを重要な素材として扱っている [周 一九九〇、一九九五、一九九六] これらの研究を除けば、關コオロギ研究において、フィールド・ワークに基づいた実態研究はほとんど行われておらず、そのほとんどは歴史、文芸研究の方面から執り行われてきた。

その方面からの研究としては、孟昭連、王世襄らの研究がある。中国文学者である孟は、コオロギ飼育文化の代表的研究者であるが、彼の研究は、書き残されてきた「促織経」、「蟋蟀譜」等のコオロギ飼育書、あるいはコオロギ文化を題材とした小説、詩歌など文芸作品を素材とし、その文化の形成史を詳細に明らかにしている [孟 一九九二、一九九三a、一九九三b、一九九七]。また、文

物研究者の王は、宋代以降のコオロギ飼育書の集成を行い、書誌的な立場から關コオロギ文化の歴史性について論述している [王世襄 一九九三]。

異色などところでは、昆虫学の分野から呉繼伝がアプローチし、コオロギ飼育伝統と自然科学との整合性についての研究を試みている [呉 一九八九、一九九三] が、この研究は、その妥当性、厳密性において再検討せねばならぬ問題を含んでいる。しかし、彼の關コオロギ文化の研究活動自体が、今でも少なからず再生産されている愛好家による關コオロギ指南書、手引書の延長線上にある文化現象であり、現在の中国漢人知識人層が織りなすコオロギ文化の体系化の作業と位置づけられる。

(2) 本稿で使用した以下のコオロギ飼育書に関しては、王世襄による影印本「蟋蟀譜集成」 [王世襄 一九九三] によった。

賈似道編輯、周履靖增補「促織経」、二卷、中国科学院图书馆藏、元明善本叢書十種本
袁宏道撰「促織志」、北京図書館藏、順治三年宛委山堂說郛續本

劉侗撰「促織志」、北京図書館藏、順治三年宛委山堂說郛續本

夢桂撰「蟋蟀譜」、一卷、北京図書館藏、光緒二年天繪閣活字本

金文錦刪定「促織経」、一卷、中国科学院图书馆藏、清音藏板四生譜本

麟光撰「蟋蟀秘要」、一卷、北京図書館藏、清刊本

秦子忠撰「王孫経補遺」、一卷、王世襄氏藏、光緒壬辰聽秋室校印本

拙園老人撰「蟲魚雅集」、一卷、王世襄氏藏、光緒甲辰排印本

李大紳纂輯「蟋蟀譜」、十卷、北京図書館藏、民国二十年石印本

(3) 本稿では、劉侗、于奕正著「帝京景物略」は、一九八〇年北京古籍出版社本によった。

(4) 後にも述べるように、ここで用いる「品種」という言葉は、家畜でいう「品種 (breed)」のように、ひとつの種のうち形質により他のものと区画され、それが遺伝的に固定された集団を指し示すものではない。それゆえ「品種」と呼ぶのは本来不適當であるが、關コオロギに関わり人々が日常的に「品種」という言葉を用いるため、本稿でもこの語を用いることとする。

(5) 北海道大学院農学研究科大学院生伊藤元氏のサンプル同定によると、筆者の取り扱った寧津産コオロギのオスは *Velarifictorus beibenkoi* の可能性が高く、さらにツツレサセコオロギ (關蟋) *Velarifictorus mitado* の可能性もある。また、紹興産コオロギのメ

闘コオロギからみた中国漢人都市民の自然観

スはツツレサセコオロギ *Velarifictorus nitida* である。この仲間は、種間で形態の差が非常に小さいため、学名が安定していないものが多い。

また、中国において、コオロギに関する分類学的、生物学的な分類は、厳密に完成されているとはいいがたく、その名称は俗称に近く、記載上の問題がある〔周 一九九〇・三〇九一三〇、一九九五・七八一八〇〕。

(6) メスコオロギには、オスと違って産卵管があり、尾が二本あるように見えるため、上海では「三尾子」、三妹子」と呼ばれている。また、上海の闘コオロギ賭博師の間では、その尾部の形状が山の字にみえることから「山字」とも称される。

(7) コオロギは、その名称ばかりでなく、それに使用される器物の名称も、北京、天津などの北方と、上海などの南方では異なる。たとえば、「鈴房」とは、上海では「蟋蟀盆」に入れるコオロギの寝床であるが、北京ではそれを「過籠」と呼ぶ。しかし、「過籠」は上海ではコオロギの体重を量るときに閉じこめる籠を指し示す。また、北京では「過籠」といったときに、コオロギを「蟋蟀盆」のなかから移す道具をさす場合もあるが、これは、上海では「提勺」と呼ばれている。北方と南方の闘コオロギ文化には、共通性も多いが、器物の名称以外にも、器物の様式や構造、コオロギの計量法などに地域性が見られる〔周 一九九五・五九一六五〕。

(8) コオロギを計る単位も、地域によって異なっている。上海で用いる体重の単位「尊」であるが、天津などでは「厘」という単位を用いる。一尊は、およそ一・八厘に相当する。また、杭州でも「厘」という単位を用いることがあり、この場合、一尊 \equiv 〇・五厘となる。

(9) 生物学の分野では「コオロギの強さと体重は強い相関がある」ということは、すでに指摘されているが、筆者が入手したサンプルの総当たり戦順位結果と、体重の相関においても同様のことがいえた。北海道大学大学院農学研究科大学院生伊藤元氏が分析した結果、二種類の測定値間の相関の強さを示す係数「Spearmanの順位相関係数」は0.8829、「Kendallのタウ」は0.7807であり、二つの変数が独立である確率はそれぞれ0.0088、0.0151と低いため、有意に相関がみられた。なお、筆者のサンプリングにおいて、闘コオロギ賭博師の選定したコオロギ、農民のコオロギ捕りが捕獲したコオロギ、ランダムに筆者が選択したコオロギと、順位は対応する。すなわち、闘コオロギ賭博師は、明らかに重い(強い)コオロギを選ぶことができ、それに農民のコオロギ捕りが次ぐ。彼らの選別で大きいものを選ぶ蓋然性は、ランダムに捕獲した場合に比べ高いといえる。僅かな体重差を確認する能力が、彼ら闘コオロギと関わる人々にあることがわかる。

引用文献

- 辺文華 一九八八 『蟋蟀選養與競闘』、上海科学技术出版社
一九九五 a 『蟋蟀経』、大連出版社
一九九五 b 『蟋蟀図譜』、上海科学技术出版社
鄧雲郷 一九九八 『増補燕京郷土記』、中華書局
フリードマン、モリス 一九九五 『中国の宗族と社会』、田村克己・瀬川昌久訳、弘文堂
Lauer, Berthold: 1927 *Insect Musicians and Crick Champions of China*, Field Museum of Natural History.
凌海成 一九九四 『最後の宦官 斌華・衛東訳』、河出書房新社
劉侗、于奕正 一九八〇 『帝京景物略』、北京古籍出版社
松井健 一九九七 『はじめに』、『自然の文化人類学』、東京大学出版会
孟昭連 一九九二 『蟋蟀秘譜』、天津市古籍書店
一九九三 a 『中国鳴虫與葫蘆』、天津市古籍書店
一九九三 b 『中国虫文化』、天津人民出版社
一九九七 『蟋蟀文化大典』、上海三聯書店
中野美代子 一九九一 『龍の住むランドスケープ』、福武書店
上海灘雜誌社 一九九七 『上海灘』一九九七・九月号、上海灘雜誌社
周達生 一九九〇 『民族動物学ノート』、福武書店
一九九五 『民族動物学』、東京大学出版会
一九九六 『フィールドノート「中国の鳴く虫」』、『鳥かご・虫かご』、INAX出版
スタン、ロルフ 一九八五 『盆栽の宇宙誌』、福井文雅・明神洋訳、せりか書房
武田雅哉 一九九二 『逸脱をよるこぶ博物学』、『サイと一角獣』(ベルトルト・ラウファア著) 武田雅哉訳、博品社
内田道夫 一九八六 『北京風俗図譜』、平凡社

關コオロギからみた中国漢人都市民の自然観

- 王世襄 一九九三 『蟋蟀譜集成』、上海文化出版社
王毅 一九九〇 『園林與中國文化』、上海人民出版社
吳繼傳 一九八九 『中國鬪蟋』、華文出版社
一九九三 『中國寧津蟋蟀志』、中國廣播電視出版社
葉大兵 一九九二 『温州民俗』、海洋出版社
張泉鑫 一九八九 『鬪蟋蟀史話』、農業考古 第一七期、農業出版社
中華人民共和國農業部 一九九六 『中國農業統計資料（一九九五年）』、中國農業出版社

執筆者紹介

千葉 恵 文学部助教授 (哲学)
川合 安 文学部助教授 (東洋史学)
菅 豊 文学部助教授 (北方文化論)
佐藤 知己 文学部助教授 (言語情報学)
清水 誠 文学部助教授 (西洋言語学)
関 孝敏 文学部教授 (地域システム科学)
池田 透 文学部助手 (地域システム科学)

北海道大学
文学部紀要
四十七ノ四
(97)

平成11年3月23日 印刷

平成11年3月29日 発行

編集者

北海道大学文学部長
北原 敦

発行者

北海道大学

(株)アイワード